



道北 農民群像

題字・長谷川功
カット・棚橋麗子

減反と転作、乳価据え置き、不安定な農畜産物価格などの厳しい状況の中で、名寄地方の農業は大きく揺れている。道北農業の動静は、地域住民の未来を映し出す鏡ともいえる。

この企画では、厳しい農業情勢の中で、時流に流されることなく大地に根を張り、明るくしたたかに生きる若手農民の姿を紹介し、明日の道北農業の行方を探ってみた。

※ ※

沖沢実さん(四六)は、名寄の市街地から西へ約八^キ、弥生地区の一番奥で牛飼いを営む。同地区の農家は約三十世帯。沖沢さんを含めた五世帯が畜産基地の構成員。九十^ハの土地(山林を含む)に、搾乳牛約三十頭、ヘレフォード(肥育牛)約六十頭を飼育する屈指の畜産農家だ。

正面から挑戦するタイプで若いころからマロンばかりやってきた。農家には珍しく、家族ぐるみで憲法マロンにも参加する。弥生に生まれ、昭和三十三年に現在地の二^キ奥に入植。牛飼いはそのころから始め、七頭搾乳までに。故人となった名寄市瑞穂の飛

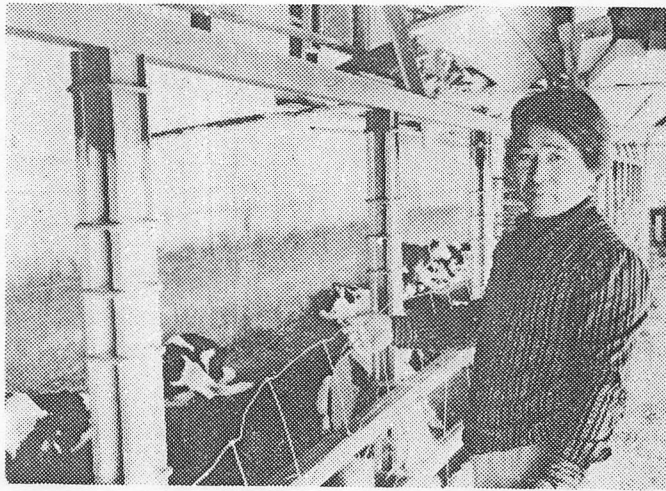


自力で築いた基礎 定着へ市民の知恵と力を

時に、種雄牛も一緒に放す——つまり自然交配だ。受胎率は百^ハ。分娩時期も三〜四月に集中する。一日に五頭くらい出産する日も珍しくない。乳牛のケガも自分で治療する。畜産基地関係の施設以外の牛舎は、全て自力で建設した。溶接、農機具類の修理も、たいて

弾野六正さんに、大いに感化される。名寄酪農の草分けの同氏に、いつも「農協や行政機関に依存するな」と指導を受けた。だから、牛や施設に手数をかけず、借金しても必ず返済する根性で経営に取り組んできた。

自力精神は今も同じ。十五年ほど前から種雄牛を導入して、人工授精はやらな。春になり放牧開始と同



用されたが、潤ったのは開発業者だけ。従来の牛飼いにマッチしない施設が出来上がった。行政関係者も助成金や補助金支給や消流対策の調査などで努力を重ねたが、負債は増大の一途。牛代、土地代、建設費の償還が迫り、牛肉価格の低迷が追い打ちをかけた。今や畜産基地は存亡の危機に直面している。

現実には深刻だが、沖沢さんに暗さはない。「借金もあると面白いもの。人生は一度だけ、好きな牛と一緒に堂々と思ったことをやってみる」ときっぱり。当面は負債を増加させず、乳牛部門の充実で切り抜ける道を模索中。その間に、ヘレフォード再生の策を練る毎日だ。

加わることに。だが、数年間で多頭飼育に移行するという方法は、両地区の農家には全く未経験の分野だった。山林を伐採し表土を削り取り、牧草地を造成するために大型機械がフルに利

十年ころからの試み。畜産基地構想が具体化する前から飼育を始めた。持ち前の負けん気と「周囲が山で、牧草主体の立地条件には寒さに強いヘレフォードがぴったり」という考えが重なり合っただけだった。

五十一年には、畜産基地事業がスタート。弥生・智南両地区で十世帯の農家が参加。沖沢さんも同事業に

名寄市弥生

沖沢

実さん

道北 農民群像



▶ 2 ◀

史を振り返ってみるとよ
い。中学生のころ、両親や
近所の農民の働く姿を見て
「あんなに懸命にまじめに
仕事しているのに豊かにな
れないのはなぜなんだ」と
痛烈なシヨックを受けた。
だから「コレがやる時はな
んとかしよう」と思ってい
た。名寄農高定時に通い

る髪を引かれる思いで稲作
りに見切りをつけることに。
寒冷地に適した白菜、レ
タス、カボチャ、ニンニク
などのそ業経営に移行する
が、農産物価格の不安定さ
がつきまとう。たぐきん収
穫して市場に出荷しても、
翌日の伝票には二東三文の
数字が農民に相談なく決め



町内元町の工場で生産が
している。製造され
ムは、最近道内の観光推
品に選定、町内外からの期
待も大きい。努力は少しず
つ実りつつある。

農産加工で報われる農
業を」と訴える佐久間さん
だが、利益追求を目的に経
営に取り組むわけではな
い。「農業は生命のいとお
しさを教育する産業。経済
の対象物とするのではなく
夢や情緒を与えるもの」と
考えている。地域づくりに
も自らの哲学を軸に発言を
続ける。「農民は家や田畑
・家畜に束縛されて情報取
集が困難だが、地域の主体
にならなければ、一次産
業が安定して自信がつけ
ば、事業者との富のパイプ
もできる」と訴える佐久間
さん。和光農場は、そのた
めの実験場だ。

農場産業振興という観点
から、農畜産物加工への関
心が各方面で高まっている。
下川町上名寄の佐久間
和夫さん(三三)経営の和
光農場は、名寄地方での農
産物加工の先駆けだ。昭和
五十年に現在地に移転して
から、消臭剤グリーン・エ
ンジェルの開発、メロンジ
ヤムの加工・販売などを手
がけてきた。

「農業は生命をはぐくむ
健康管理産業」というのが
同農場の基本路線だ。サラ
ダメロン(系統各種を含む)
ニンジン、キャベツ、グリ
ーンアスパラガス、スイー
トコーンなどを町内数箇所
にある畑に作付けする。農
民自らが農産物加工に取り
組むことで付加価値を高
め、価格を決定する土俵を
獲得すべき」というのが佐
久間さんの持論。ここ五年
あまりを、付加価値を高め
実践に賭けてきた。

和光農場の実践を理解す
る。佐久間さんの個人

農産加工道の への

一・五次産業に挑む 価格決定を農民の土俵に

ながら、下川町二の橋で水
稲栽培に取り組む。周囲の
農家が、経営の安定を求め
畑作から酪農へ移行する時
期だった。北限の稲作安定
を目指し、民間育種家や訓
子府の水稲試験場の指導を
受けた。耐冷性品種の導入
や水田の状況把握に情熱を
燃やす日々。だが、品種改
良しても稲の生育適温は変
わらないことを実感し、後

られていく。報われぬそ業
経営の中で、適正価格が無
い実態から、価格決定に自
らが関与できなくては意味
がないのでは?、国の都
合で外国農産物を輸入し、
農民が振り回されていいの
か?と疑問を抱いた。
昭和五十年に現在地に移
転。農産物を加工し付加価
値をつける試み——一・五
次産業への挑戦を始めるこ

とに。最初に手がけたのが
消臭剤グリーン・エンジェ
ルの開発、苦心の連続だっ
た。効能書きを法律の字句
にマッチさせるために、せ
つかく印刷したラベルを捨
てたこともある。効果を理
解してもらうために東京の
薬品会社や歯科医を訪ね歩
いた。おかげで化学用語や
流通ルートへの理解を深め
ることができた。三年前、

東京・銀座のデパート前で
横断幕を掲げ、鉢植えのア
スパラを売ったことも。
五十年ごろから試作して
いるサラダメロンを原料に
ジャム製造を行うために、
昨年九月、株式会社を設立

「健康管理産業」を指
す佐久間さんの試みに、農
民、農協、行政、消費者が
学ぶ点は多いはずである。

下川町上名寄

佐久間和夫さん

82. 7. 23 (金)

道北

農民群像



▶ 3 ◀

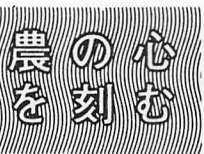


だ農業の中で、子供たちと一緒に生き物を育てる大変さや喜びを考へるためだ。農村の特色を生かして子育てをすること―それが創作の源泉となっている。

創作に没頭できるのは冬だけ、何度も会をやめようと思った。そのたびに仲間から『農家で書く人は少ない。ペンを捨てなさい。』と励まされ今日までやってきた。とかく農村女性が外へ出ることを特別視する風潮の中で、町のメンバーから学んだことは多い。だから『これからの時代は、農村女性も殻に閉じ込められず、積極的に町の人と交流して自分の趣味を積み上げてほしい。それが町の人の農村理解にもつながるはず』と訴える。

農村の世界を描いて

子供の成長も文学に託す



詩や童話の創作に取り組む。農村で働くことで見えてくる世界を描く―これが、作品の主題となってきた。

五十嵐さんのお宅は、夫とその両親、小学生の男の子が三人の七人家族。小麦、ビート、ジャガイモなどを作付ける畑作専業農家だ。

もともと農家で生まれ育ったわけではなかった。高校卒業後、実家のある下川町の保育園で保育士として働く。農家出身の同僚の女性との出会い。彼女は世間の風潮とは逆に『自分は農家にしか嫁がないよ』といつも言っていた。農村青年た

ちの学習の場・三愛塾に参加したのも彼女の影響だった。当時、町の青年部の集まりにも加わっていたが、夜更けまで議論を続ける三愛塾の熱気に圧倒される。町の青年と違い、親の苦勞を見て育つたためか、地に足のついた考えを持っているな―と実感した。三愛塾

と派手なことは好きではない。家の中でものを書くことに自然と関心が向いた。最初は、詩を作ってみた。だんだんと童話にも取り組む。自分の子供に関心が向くし、子育てによい影響があるのでは―と考えるようになった。五十二年暮れに『名寄児童文学の会』

で現在の夫・勝さんと知り合い、結ばれる―昭和四十四年のことだった。結婚したてのころは、農家の仕事を覚えることで精いっぱいの日々が続く。出産、子育て、農作業、家事

と趣味のことを考える余裕はなかった。やがて子供のおむつが取れてきたころ、農村の中で何ができるんだらうかと考えた。もとも

に入会、仲間とも出会う。童話の創作は、農作業の手が休まる冬の間、原稿用紙のマスを利用してゆく。

同会の文集『だんろ』五号には、『拓のキャベツ』と題する作品が掲載されている。キャベツの世話を母親から任せられた少年が、害虫や野菜の病気と出合い、そ菜専業農家の暮らしを知りながら、わずかな個数の

収穫の喜びを味わう―という筋書きの中に、農村の生活と子供の成長が生き生きと描かれた作品だ。農業と大型機械を使わざるをえない農業への問いかけ、坂の上の小学校のほんのりとした様子も詩に託してきた。

題材は生活の中にある。作品を子供に読み聞かせること、これは僕かい。こんなことがあったんだね」とす

ごく喜ぶ。『フィクションの部分を読んで、親の考えを理解するきっかけにしてほしい』と思うと、とても励みになる。ウサギ、ワトリ、牛の世話も子供たちにはさせる。機械化の進ん

名寄市智恵文智北
五十嵐逸子さん

『農業の良さは、夫婦がともに働けること。それが報われるともっといいのだけれど』と語る五十嵐さん。今後の夢は、近所のおばあちゃんたちの苦勞話を聞き書きして、後の世代に残しておくこと。土に生きる心を描く五十嵐さんの営みに、共感する人が各地に育つてほしいものだ。

名寄市智恵文智北
五十嵐逸子さん

82.7.30 (金)



道北 農民群像

▶ 4 ◀

名寄市内から国道四〇号線を北上すること十、右手に泉さんの豚舎がある。季節変動はあるが、常に九百頭ほどの豚を飼う。母猪から子を取り、育成して出荷する養豚一貫経営は父親の代から続いている。

試験を受験して合格。だが、ただ給料をもらって、指示どおりに生活すること疑問を抱き、入隊を取りやめ、両親が営む養豚業を手伝うことに。それから十一年の歳月が流れた。生き物を扱う畜産農家の生活は年中無休だ。午前六時すぎから作業開始、飼料

とにらめつこの毎日だ。養豚一貫経営の難しさは分婉と育成にある。ひと月に二十頭前後が分婉するが、難産の親豚やつぶされる子豚が出ることも。分婉終了まで人手をかけてやると夜も眠れない日が続く。育成段階の病気発生は養豚



ざるをえない状況の中で、泉さんはコスト低下に力を注ぐ。外国産の配合飼料への依存度が高い養豚経営からの脱却を目指す。ひとつは残飯の利用だ。自衛隊名寄駐屯地の残飯を購入し豚に与え、年間で一割ほどの飼料代のコストダウンにつながっている。もうひとつは、子をとる豚(種豚)の自然放牧の試みだ。六月、十月の間、交配がすむと分婉するまで、放牧する。いつも四十頭ほどの豚がクロパー主体の牧草畑(約二・五畝)に放たれている。このやり方は、夏期間の飼料代が半分ですみ、病気に対する抵抗力もつき、成果は着々と上がっている。経営の足腰を強めるために、アスパラガスの作付けも始めた。豚肉相場の安い時期を補完するのが目的。現在〇・五畝を作付けするが、来年は増反を予定中だ。また、地域ぐるみで農閑期の食料自給加工に取り組み、智北地区と、豚肉販売の提携を始めた。コストダウンで畜産危機を乗り切ろうと、泉さん一家の努力が続いている。

にる 豚き 養生

コスト低下に努める 複合経営で生き残り策を

情勢には厳しいものがある。米・牛乳のように基本価格のあるものと異り、相場の変動をもろに受けた。豚肉の道内消費量は昨年小売価格の上昇から、減少傾向で推移している。一方、コストの安い外国からの豚肉輸入量の増加は、国内の畜産農家を圧迫する結果に。全国農協中央会の調査でも、養豚一貫経営

夫と両親が働き手。六歳を筆頭に三人の男の子があり、合わせて七人家族だ。昭和四十五年現在に地に移転する前は、名寄市北山で養豚と畑作を営んでいた。当時、同地区では離農が進み、数軒の農家だけで経営を持続することは困難だった。父・繁正さんは、仲間の菊地清一さんと相談して、二軒で現在地に移転

給与、残飯収集、投薬・病氣治療、交配、清掃、糞出し...とけっこう暇がない。豚舎から一、離れた自宅から作業に通う。豚の異常をキャッチするために、家族のどれかが豚舎に泊まり込む。仕事の主力は、利子さんの。いかに子豚を生ませ、コストをかけずに育てるかに努力を傾ける。豚肉相場を把握し、ノート

経営の命取りになる。健康管理、病気の早期発見に心を配る。苦勞は多いが、マイペースでやれる楽しさもある。「人にとやかく指図されず自分のやり方ができる。エサの給与方法、交配・管理の工夫で一生命努力すれば、必ず経営に戻ってくる」と繁一さんは語る。今、畜産農家を取り巻く

で戸当たり一千九百万円の平均負債額をかかえることが判明している。豚肉価格の低迷、飼料代、諸経費のアップで養豚経営の前途には厳しいものがある。豚肉の世界市場と競争せ

名寄市智恵文瑞穂

泉 繁一さん



54
82. 8. 6 (金)

名寄地方の農業問題を学習するために「名寄農業問題語る会」(以下「語る会」と略)が活動を開始したのは、昭和五十三年二月のことだった。長い歴史を持つ道北三愛塾で互いに学習しあい、恒常的に交流できる場を、との声が出されたのが会発足の原点にある。月一回の例会は、この七月二十三日で五十回の節目を迎え、参加者は延べで九百八十人に。若手農民や普及員、教員、短大生などが集まり、地域の農業の現状や将来について、打ちとけた雰囲気でも語り合う。

「語る会」の特徴は、出入り自由のゆるやかな組織という点だ。例会の企画・運営と案内は幹事会が担う。名寄市曙の水田農家で四日クラブの会長も務めた阿部勇さん、道北センター主事でも三愛塾を支える岸本芳朗さん、農業改良普及員の鈴木清史さん、名寄女子短大助教で農業問題の調

査・研究を続ける中嶋信三さんの四人が幹事となり、まとめ役を果たしている。常連的なメンバーは三十人ほど、例会案内の内容と自分の都合を見はからって参加する。農作業が終わる午後七時すぎから開始、テーマに沿って話し合う。レポーターは、たいていは地元からの自賄いで、篤農家

を年四回発行している。これまでの活動は、参加者にとってどんな意味があったのだろうか。中嶋幹事は「道北は日本農業の縮図、多彩なテーマ設定で全体像が見えてきたのでは。ほとんど自賄いで報告し、話し合うやり方は、とかく技術習得に限定されがちな農業教育の場に、幅広い視野



と活発な発言が相次いだ。討論の中で、今後の課題として①地域農業の歴史・実態をきちんと記録に残すこと②行政、農協、農業高校関係者などのメンバーを広げる③地域農業の先駆者の取り組みに学ぶなどを決めて散会。午後十一時近くになっていた。

一方「名寄農業白書をつくらう」という計画も検討中だ。これまでの学習の成果を生かして、人の動きを中心に、地域農業の歴史、統計資料の集成、先進事例の紹介、今後の課題などをまとめていく予定でいる。現在、鈴木幹事を中心に農民サイドに立った白書づくりに会員たちは意欲を燃やしている。

地域農業を拓く

自賄いの精神を培う 名寄農業白書をつくらう

や農業青年、普及員などが当てる。例会で取り上げたテーマは、バラエティーに富んでいる。稲作転換、農協の在り方、農薬、農業高校、牛乳過剰、農産加工、経営診断などと、農業関係者が関心や悩みを持っていてテーマばかりである。例会内容や会員の紹介を図るために、機関紙「展望」

を育てることができた。交流の場として持続すること「大切」と分析する。五十回目の節目を迎えた七月二十三日の例会には、農民、普及員、教員など十人が参加した。この日のテーマは「語る会の到達点」。

中嶋幹事が、北海道農業の現状と「語る会」の活動の意義を報告した後、今後の考えをもっと言うべき...

方向を参加者同士で話し合った。農民の参加者からは「農協職員がもっと例会に参加してほしい。若妻会や農協青年部へ呼びかけて、自発的な学習の場が各地域で生まれると心強い」「掘り下げの足りなかった問題を再び取り上げてはどうか」「普及員は農村で自分の

などの発言。普及員からは「地域で活躍する農民の話や営農集団の取り組みを聞いたことが最大の収穫だった」「職場だけでは見方が狭くなるが、この場は広い視野を培ってくれる」など

名寄農業問題を語る会

道北

農民群像



▶ 6 ◀

昭和二十九年に二十四戸あつた下川町の養鶏専業農家は、飼料代の値上がり、卵価の低迷などで減少するばかり。今では阿部勇夫さん(四一)宅だけが残り、独壇場の観もある。だが、一戸になった分だけ責任も多大、厳しく自分をみつめなければ、と控え目に語る。

養鶏専業農家として生き残るためには、多くの苦節があつた。

妻のトキ子さん(三六)と女の子二人、男の子一人の五人家族。市街地から通う専従の主婦と夫妻の三人が働き手だ。毎朝六時三十分ころから作業開始、飼料給与、給水、清掃、採卵・選別、配達…と年中無休。三人のチームワークが何よりも重要になる。

阿部さんが養鶏に取り組み出したのは昭和三十八年——二十二歳の時だ。両親の営む畑作を手伝う一方、冬場は山稼ぎに出ている。



地元消費を基本に 自家配合飼料で質向上を

農業の将来を模索する毎日だつた。同年、町内十七戸の農家による養鶏団地構想に参加——千羽飼育でスタートを切つた。同構想は、農家は成鶏を飼育、採卵するだけ。ヒナの育成、選卵、出荷は農協で、という内容で、ピーク時には三万羽

局、メリットは農家に戻つてこなかった」と阿部さんは当時を振り返る。

四十年代半ばから、さまざまな工夫を凝らし、懸命に働き、現在は年間平均八千羽を飼育する。昨年からは、町内の養鶏専業農家は阿部さんだけになった。生

近くが飼育されていた。だが、同四十一年ころから卵価の低迷、下川農協の赤字再建が重なり、前途に暗雲が立ちこめることに。ヒナの質のばらつき、成鶏の病気が発生で産卵率が低下したのも四十年代だつた。当時の農協主導型のやり方に、多くの養鶏農家が苦勞を重ねた。「個人の経営努力で改善できる分野が狭く、外部の変動に左右された。結

き残りの理由は、施設に金をかけずに飼料調整、ヒナの育成、販売方法などを精力的に研究・実践してきた点に尽きる。

ヒナの育成は四十年代から手がけたが失敗の連続。だが、同五十一年から卵肉兼用種の「ゴトウ三六〇」に切り替えることで、鶏の能力が安定してきた。同種は国内の飼育率が五〜六割と少なく、飼料給与が難



使うほかはすべて手作だ。「すごく労力が必要だが、鶏の健康維持、卵質の向上に役立つ。適切な給与で鶏の能力を十分發揮できる」と自信を持つている。

洗卵、選別、箱詰めして出荷するが、半分は町内で消費される。大消費地から遠い下川では、輸送コストなどの面で都市周辺の企業養鶏にかなわない。生き残る道は、品質の良い卵を地元の消費者に食べてもらうしかない。地元消費を基本に置けばコスト低下、品質アップも可能だ。何よりも生産者と消費者の顔の見える関係ができる。今では町内で行事のある時は「阿部養鶏のさくらタマゴ」は引く手あまた。厳しい経営環境の中で着実に販路を固めている。

しいことから企業養鶏には適さない。商品についての特微づけを求める時代の要請にもマッチしていた。赤っぽい色が殻が固く、卵黄がしっかりとしている「ゴトウ三六〇」の卵は、阿部養鶏のさくらタマゴの商品名で販路を固めつつある。

の始まり。現在はトウモロコシ、ダイズ粕、米ヌカ、貝殻、活性炭などを単味で購入、あらかじめ作成してある九十五種類の成分表から季節、産卵率、体重などに応じて四〜五種類を選んで自家配合する。ミキサーを

「今後も養鶏を続けていける——という見通しだけは持てる。一戸だけになったことで消費者に対する責任は重い。厳しければとおもしろみもある」ときっぱり。自力で研究を続け、前向きな努力を重ねることが生き残りの条件のようだ。

下川町バンケ

阿部勇夫さん

道北 農民群像

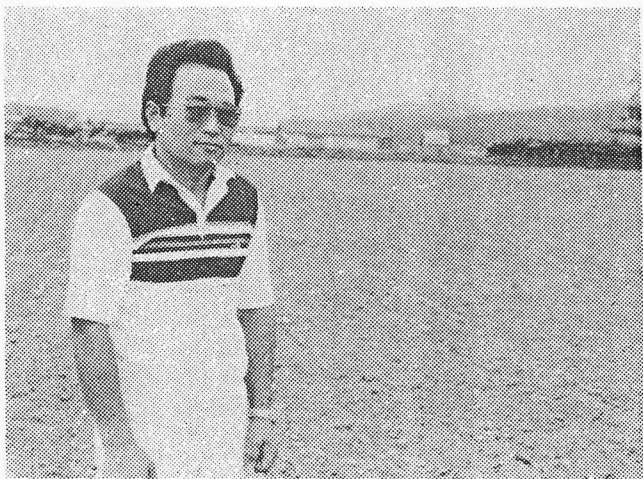


▶ 7 ◀

美深町の市街地から国道四〇号線を北上すること約五*、天塩川を挟むようにして向井豊文さん(三二)の住宅と畑がある。青首大根を主体に作付けし、漬物用として自力で販路を開拓してきた。『品質の良い大根を収穫し、販売まで責任を持つ姿勢と、販路拡大に宣伝力を生かすことが大切』と力説する。

文地区に捨ててあった中古品を自分で修理して使いこなす腕前の持ち主だった。同四十六年に兄が結婚、特技を生かして機械関係の仕事に就く。農業経営は豊文さんの双肩にかかる。負債の増大で苦しい時期であった。

大根を作り始める。販路が分からず農協に相談するが、詳しい人はいなかった。結局、三割をスーパーに卸し残りは行商で販売することに。もし売れなければ、天塩川に大根を捨ててしまおうという意地もあった。町内をはじめ名寄、士別、



昨年からは、五十一年以来つなりのあったスーパーみしまとの提携を強化、生産量の八割(約十万本)を同社の全店舗で販売することに。残りは、青空市で販売する。同店への依存を避け、自力で文案作成と絵を描いて宣伝のチラシを各地に配布する。ひとつの会社と提携、市場を確保して相互関係を基本に大根を作りたい』というのが向井さんの持論だ。今後、こうしたスタイルを追求するつもりという。

同町西里・富岡両地区に六・五畝の畑と二・三畝の休耕地(牧草作付中)がある。畑には、青首大根、聖護院大根、トウモロコシなどを作付ける。豊文さんと母親との二人暮らしだ。

昭和三十九年、中学校卒業後美深高等酪農学校へ進む。遊びたい盛りで、正直言って農家は好きではなかった。商業者に対するあこがれと、農業への劣等感が交錯していた。結局、学校を中退、現在地で水田と畑作を営む兄を手伝うこと

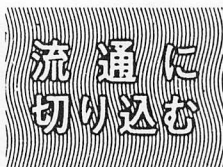
負債返還のために、町内の農産物業者へアルバイトに通う。野菜・でんぶんの買い入れ、選別、販売などで商業者から多くを学んだ。『雑穀を農協や業者に売らだけの農業では先が知れている。今までのやり方ではだめだ』と痛感する。

アルバイトを辞めた同五十二年、自力で作付けして集荷・販売までを考えると、五畝ほどの漬物用青首

枝幸、浜頓別まで行商する毎日。反響はよかった。買手に『うまい大根だね。来年も頼むよ』と言われ意気が上がった。

反響の大きさに呼応し、同五十二年に一・五畝に増反、名寄市の農機具業者から大根洗い機を購入した。町内にチラシを配布して、『洗い大根を泥付きの物と同じ値段で売ります』とPRに努める。その結果注文が

に、直接買いに来てもらっ



大根作りに賭ける

生産・販路開拓を自力で

殺到するが、機械の効率が悪く、泥付きのまま販売する結果になってしまった。だが、このやりとりを通じて、『大根作りの向井だ』という評判が広がるようになった。

同五十四年のこと。配達のため非効率さを解消するために考えた方法だった。天塩川の築堤わきに広がる大根畑に、直接買いに来てもらっ

た。漬物の季節十月に、名寄や士別、中川、雄武などから車でやって来て、大根を買い求める人でにぎわった。畑まで来た人は、納得と提言する。流通の分野にまで積極的に取り組む向井さんの姿勢に学ぶ点は多い。

『美深には観光的なお祭りではなくさんあるが、地場産業を軽視している。でんぶ・木材加工などで工夫して、地についた産業を』と提言する。流通の分野にまで積極的に取り組む向井さんの姿勢に学ぶ点は多い。

青空市を開き始めたのは同五十四年のこと。配達のため非効率さを解消するために考えた方法だった。天塩川の築堤わきに広がる大根畑に、直接買いに来てもらっ

美深町富岡

美深町富岡

向井豊文さん

82.8.27(金)



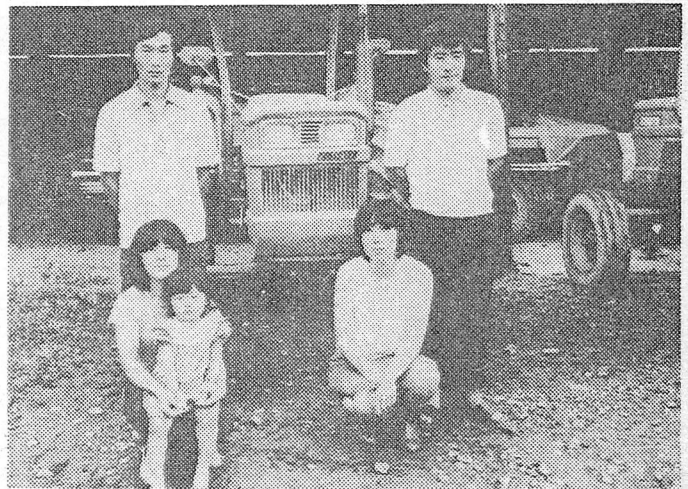
道北 農民群像

▶ 8 ◀

共同経営に踏み切ってから十九年、二代目の若者たちが朝日農場の担い手となる時代になった。チームワークを発揮して、酪農経営に取り組み、スタッフの相互協力が、経営の重要なポイントだ。

豚経営の部分的共同化を手がけたのは、同三十六年のこと。だが、自分の仕事に主力を注ぎがちなため、仲間同士で集まって相談を重ねる。共同化に熱意を持つ三戸が、五万円ずつ出資、農地・農機具をすべて共同に提供する形で、同三十八年に同農場が発足した。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。



なポイントになる。雪印種苗(旭川市)に委託して粗飼料の成分分析を実施するとともに、年間四回の飼料プログラムを設定、コンビユーターを利用して、乳量に応じたキメの細かい飼料給与を実施している。その結果、個体当たりの平均乳量増加という結果が表れ、自信を深める。高タンパクの粗飼料として注目を集める、ルーサンの導入にも積極的だ。トラクターの駆動軸を利用してファンを回転させる方法で、同五十五年に風力乾燥施設を完成させた。同施設には、梱包したルーサンを一回に千五百個ほど乾燥させる能力があり、粗飼料のレベルアップに一役かっている。ほかに、経理を各自で分担、簿記の記帳に余念がない。



相互協力を基本に ゆとりある経営を目指す

共同経営に踏み切ったのは、同三十八年のこと。だが、自分の仕事に主力を注ぎがちなため、仲間同士で集まって相談を重ねる。共同化に熱意を持つ三戸が、五万円ずつ出資、農地・農機具をすべて共同に提供する形で、同三十八年に同農場が発足した。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

共同経営に踏み切ったのは、同三十八年のこと。だが、自分の仕事に主力を注ぎがちなため、仲間同士で集まって相談を重ねる。共同化に熱意を持つ三戸が、五万円ずつ出資、農地・農機具をすべて共同に提供する形で、同三十八年に同農場が発足した。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

朝日農場

名寄市朝日

共同経営に踏み切ったのは、同三十八年のこと。だが、自分の仕事に主力を注ぎがちなため、仲間同士で集まって相談を重ねる。共同化に熱意を持つ三戸が、五万円ずつ出資、農地・農機具をすべて共同に提供する形で、同三十八年に同農場が発足した。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

共同経営で大切なことはチームワークに尽きる。農場の二代目のひとり矢吹功さん(五二)は「全員で決めた事柄は、必ず実行することが大切。約束を守る」というのが決め手。それがないとトラブルが起きる。さいわい全員正直な人がそろっており、酒も弱い人ばかり。

82.9.3 (金)



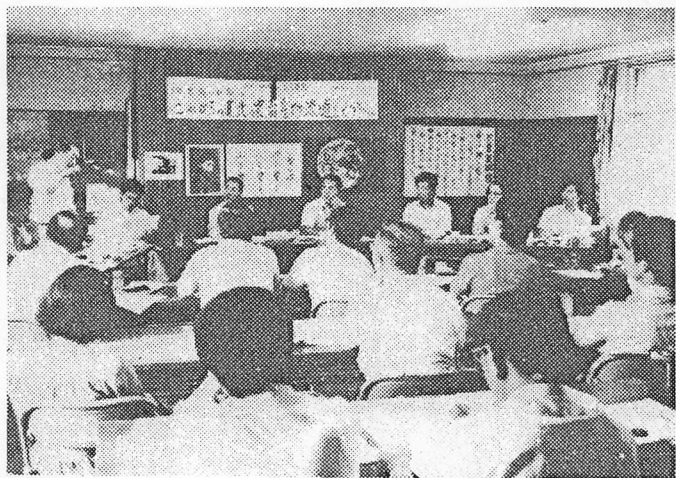
道北 農民群像

▶ 9 ◀

道北三愛塾が産声をあげてから、二十一年の歳月が流れた。クリスチャンの農村伝道活動の一環として始まった三愛塾運動は、農業を囲む諸情勢の変容の中で転換点を迎えている。

長を務める中川美恵子(旭東)松本富美子(共和)さんのように、農村女性のリーダー格が塾出身者というのも特色のひとつだ。

最近のテーマは「道北農業の現実をどう考えるか」「食糧を考える」「農産加工と経営転換の可能性」などで、道北農民が直面する



を繰り広げた。斎藤、五十嵐、佐久間の各氏は、いずれも地域で農産加工を試行する。「農民が野菜の価値を認識し、消費者に納得させる自信を持たなければ」(斎藤氏)「地場産業振興には、地元の特産物を地元で加工し、地元で消費する」の考え方が重要(五十嵐氏)。「農民が流通機構にメスを加える意味でも、農産加工にもっと力を注ぐべき」(佐久間氏)と農業サイドの主張を展開。木島、美土路両氏も流通の現状と消費者教育について示唆に富んだ指摘を加えた。

三愛塾運動は、樋浦誠略農学園大学初代学長の提唱で昭和二十八年に始まる。同学の夏休みを利用して若手農民を啓蒙し、農村に奉仕する公開講座の性格を持っていた。「神を愛し、人を愛し、土を愛す」とする三愛精神が基本にある。

昨年五月カナダに帰国したフロイド・ハウレットさんが、二十八年に名寄で始めた農村福音学校が道北三愛塾の前身。日本キリスト教団道北センターが開所した三十五年、中村光夫主事(当時、現名寄市議)と同氏が中心になり、道北三愛塾を発足させる。

各地から農村青年が集まり、巣立っていった。名寄・智恵文両農協若妻会の会

自ら考えていく気風がある。地域の主役は農民なんだ」という点で、力を合わせて発展させたい」とファイトを燃やす。

「これからの道北の農畜産物流通をどうつくるか」をテーマに、第四十四回道北三愛塾が、八月二十六日から二十八日まで開かれ

課題を正面から議論する。昨年秋からは三愛塾実行委員会が発足し、道北センター主催のプログラムから、地元農民とクリスチャンとの共同作業へと転換を図った。実行委員のひとり風連町豊里の稲川秀雄さん(二九)は「二年前、先輩と一緒に出席したのが参加のきっかけ。三愛塾では指導を仰ぐのではなく、農民

流通の新たな分野を模索する

シンポジウムでは、木島秀雄スーパー三島社長、美土路達雄名寄女子短期大学学長、斎藤清久士別農園理事長、五十嵐勝智恵文農協理事、佐久間和夫和光農場長が話題提供者となり、論議

産声をあげて二十一年、農民主体の学習の場を「三愛塾の歩みが続く。」



農民の自立を求めて 流通の新たな分野を模索する

牛乳の四部門で産直を実施、消費者の立場から農業問題をつめぬ。農畜産物価格は、生産者との交流を深め、原価計算を積み重ねて決定する。山本専務は「子や孫に、どんな食料を託すのかを問い直す徹底した消費者教育が必要。道内での新しい流通経路開発を真剣に考えるべき」と指摘を加えた。

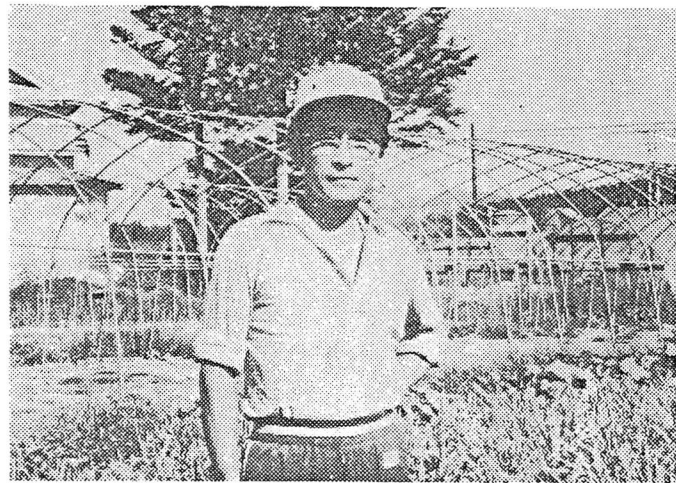
道北三愛塾

道北三愛塾

82 9.10(金)



▶ 10 ◀



からだ。下川の米も様変わりして、モチ米への移行が検討される時代になった。三好さんも、モチ米生産を通じて農民同士の技術研究が復活することに期待をかける。

稲作を続けながら、農村社会をみつめて二十年あまり。減反政策が始まってからの十数年の変遷を「かつての農民魂が薄れ、経済観念が先行し、土に生きる姿勢に欠けるのでは」と分析し「都市文化に流されるのではなく、農村がはぐくむ心の豊かさを地域ぐるみで残すべき」と語る。

減反反対の方針を貫けなかった農民運動にも「将来の展望を持って、子供たちが喜んで働ける農村環境づくりに努力することが大切。最近の農業見直しの機運の中で、農民同士の信頼関係を取り戻す時期では」と提言する。

多くの農民が時流に押し流され休耕奨励金によって、かりそめの「安定」を得ている中で、土に生きる心を求め、減反政策への抵抗を続ける三好さんの営みは貴重だといえる。

下川町上名寄

三好喜代丸さん

昭和四十四年のピーク時には九百二十四畝に達した下川町の水稲作付面積は、減反政策の進行で様変わり。今では減反率八九割、百六拾が作付けられるにすぎない。減反政策に批判を加える農業関係者は多いが、休耕奨励金を拒否し稲作を続ける農民は少ない。三好喜代丸さん(四〇)は、下川の稲作を守りたいとの一念で、この十数年間減反をせずに経営を続けてきた。農家の生産意欲を規制する農政は基本的におかしい」という農民としての憤りが原点にある。

三好さんのお宅は、妻のケイ子さん(三七)と母親、小四から中三までの二男一女の六人家族。でんぶん工場を経営していた祖父の代に農業の素地ができた。三十六年に名寄高校を卒業。大学進学の意味もあったが父親が病弱なため断念、農業に就く。同級生の大部分は就職・進学組で、

農業の道を歩むのは三好さんだけ。当時は農村に活気があり、七ヶタ農業を目指そう、との気運も強かった。パンケの阿部勇夫さんの影響で四日クラブ活動に入り、町主催の技術講座にも参加する日々が続く。減反が始まった四十五年ころは普及所が下川にあり、

農協水稲クラブの技術交流も活発だった。三好さんもまた、ほ場整備を進め、水田主体に移行する。稲作に情熱を傾けていた矢先、減反政策が登場、眼前に立ちほだかる。農民団体はこそぞって、減反反対の声をあげた。減反の始まる四十五年に、サンルの秋葉義春さんが委員長を務めていた下川町農民連盟の執

政に憤りがわいた。憤りが怒りへ、それが減反を拒み米を作り続ける姿勢へと進む。三好さん宅の現在の水田面積約四・五畝は、四十六年当時とほとんど変わらない。「精魂を傾けた稲作が許されないのなら離農と同じ。農民運動に参加しながら休耕するのではスジが通らない。休耕奨励金を受け取った方が経済的に



休耕を拒み稲を作る

子孫に誇れる農村づくりを

は楽だが、歯をくいしばり頑張りとう考えての減反拒否であった。十数年というもの、奨励金を受け取り他産業に従事する農民たちを複雑な気持ちでみつめてきた。二十八歳の時から町会議員を務めるが、休耕せずに議会活動が続けてこれたのは、妻と母親が農作業の第一線で活躍した力が大きい。

82.9.17(金)

道北 農民群像



▶11◀

日々の農作業に追われる農民の暮らしの中で自らの経営内容の把握は、とかく「ドンブリ勘定」になりがち。的確な経営分析のためには、簿記の記帳が重要な意味を持つ。数字に強い農民に―として活動を続ける「美深町農業複式簿記研究会」(渡辺祥一会長)は、道北農業の将来に明るい話題を提供してくれる。

同研究会の前身は、昭和四十六年に町内の水田農家の若者四人でスタートした「複式簿記研究会」だ。税金の白色申告をやっていた父親たちのやり方への疑問が出発点。繰り返し還付、減価償却の特例など税法上の特典のある青色申告を、農業経営に導入しよう」と相談。そのためには所定の帳簿書類を備え付け、複式簿記を記帳することが必要と分かるが、町内に詳しい人はいなかった。商業簿記とは勘定科目が異なっていた。結局、この年の春か

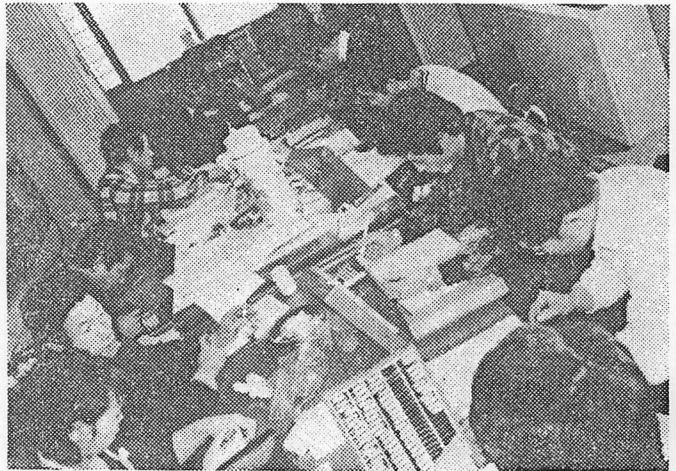
ら十一月にかけ週二回農作業が終わった夜間に名寄農業高校に通い、坂野孝教諭(当時)のもとで講習を受けることに。渡辺さんのほかに樋口国夫、山下義博、山藤政理さんの三人が足けく通った。農作業の疲れが出て眠くて仕方がなかったが、講習の後、四人そろって

後も少人数で続き、新研究会へと引き継がれる。二十〜三十代の若手農民七十三人が参加する新研究会は、五十四年に発足する。会員の部門・地域別を構成して、きめ細かな記帳を目指す。農閑期の十月、一月には帳簿を持ち寄り検討を加え、昨年から



経営分析を目指す 数字に強い農民になろう

ら各農家の経営分析も進める。多くの農民が同会に参加するようになったのは、現副会長の市川裕一さん(川西)の影響による。市川さんが美深町農協青年部の部長を務めていた時に酪農学園短期大学の複式簿記講座に仲間を募って参加、一期、二期合わせて五十三人が受講したのが会員の増の理由だ。



考え、近所の主婦と一緒に五十五年暮れから参加する。何年もペンを握ったこともなく、途中で投げ出そうと思ったが、周囲の激励に支えられた。家計簿は記帳していたが、経営全般に目が届かなかった三田さんだが、簿記を始めて考え方が変わった。「組協の内訳が理解でき、資産や諸経費が一目で分かるようになった。財布を預かる女の方が生活に切実感があるのにも役立つ。簿記仲間と話し合う機会も増え、家庭内で夫婦が共通の目標を持てる」と明るい表情で振り返る。

農協内に同会の事務局がある。農協スタッフは、資料作成など、縁の下の力持ちの役目を果たす。簿記によって経営のムダが分かり、農協運営に反映することも。農協振興係の村本修二さんは「若い農民は熱心で、農協にある古い資料を集めて乳価の比較をするなど努力家ばかり。こちらも勉強になります」と言う。

「数字に強く、視野の広い農民に―と同会メンバーの努力が続く。

て名寄市内で食事をするのが楽しみであった。講習の成果は、早速翌年の経営に導入、勘定科目ごとこまめに簿記を付け、青色申告を実施した。それまで概算でやっていた状態だったが、資産や年間費用の把握が可能となり、みるみる数字に強くなる―という青色申告の効用も表れた。同会の活動は、その

簿記への取り組みは、会員たちの生活を見直す契機となった。渡辺会長は「帳簿作成のために、毎日メモを取る習慣が各自についてだけでも収穫。経営の全容を把握することで農業に対する視野が広がった。農家の場合、現金を手に入れない期間の全取引が計上される(組合員勘定(組勘))が便利なので安易な経営に陥

りがち。互いに勉強するのとで組協への依存も薄れてきた」と語る。

会員には主婦の姿も目立つ。三田常子さん(六郷)は「夫が記帳できるのだから自分もやれるはず」と一歩の努力が続く。

美 深 町

農業複式簿記研究会



荷、十月末には二次分の収穫に入る予定だ。価格は昨年より低い、まずまずの収益も見込まれ、順調なすべり出しとなった。

課題も見えてきた。今年、鶏糞と有機質肥料を施用したが、そ菜栽培には堆肥がポイント。「ワラを積んで堆肥を作らなきゃ」という気運も生まれつつある。風連農業の方向について仲間同士で夜遅くまで議論することもしばしば。

『モチ米への大胆な転換が必要では』との発言に、『少面積でそ菜の積極的導入を』との意見が出され話し込む。結論は出ないが、活発に議論する気風が同組合の活動を支えている。

『野菜を導入して、汗を流して真剣に努力しなければ上川農業は取り残される』と三輪会長は水田農家に提言する。消費者にも、『休耕奨励金で農家は楽でしょう』というのは誤解。減反がなければ稲作も安定したはず』と訴える。

同組合では、来年は増反して年間三回の出荷を目指す。減反後、を模索する若手農民の努力が続く。

風連町豊里・瑞生

長ネギ生産組合

黄金色の稲穂の波間にコンバインが駆け巡る光景を各地で見かける季節になった。米どころ風連の田園風景も、減反政策の進行で休耕田が目につく。地域の将来を決定する上で、転作物に何を選択するのかが重要な課題だ。暗中模索の稲作経営の中にあつて「長ネギ生産組合」(三輪幸満会長)は、休耕田を活用して新しい分野を開拓しつつある。

同組合は風連町豊里・瑞生両地区の水田農家七世帯が参加して昨年九月にスタート。三輪幸満(四七〇豊里)沼田満(四一〇瑞生)種田芳雄(三一〇同)佐藤勉(三〇〇同)堀江英一(三〇〇同)山口裕司(二六〇同)中野秀敏(二五〇同)さんが構成員だ。いずれも若手農民ばかりで、集まると議論百出となる。佐藤さんは風連農協青年部下多寄支部長、堀江さんはモチ米生産組合副組合長、中野さ

んは風連の未来を築く会会長と自己主張の強い人が多い。各自の平均耕作面積は約七畝、水田を主体に転作物として小麦、大豆などを作付けしてきた。組合仲間のうち三戸は、ヒマワリ栽培を手がけるなど勉強家ぞろいだ。

長ネギ導入のきっかけは、谷市まで出向いて、農協、風連なら雪も少ないし、手間もそんなにかからないよ」と勧められ、導入する気になった。話を聞きつけ仲間も七戸に増え、稲作転換補助事業のレールに乗せることで役場とも相談がまとまる。今年二月には、深谷ネギ、で有名な埼玉県深谷市まで出向いて、農協、



長ネギ作りを試みる

そ菜導入で新分野開拓を

昨年夏、三輪会長の近所の池田康男さんと、モミガラを用いた長ネギ栽培を研究中だった山田秀夫さん(幌加内農高教諭)当時、現旭川農高教諭)との出会い。

山田さんの勧めで三輪夫妻と池田さんが、六年間の実績を持つ幌加内町の農家を訪ねたのが昨年九月のこと。少面積で高収益を上げる様子に驚嘆。訪問先で、

生産農家、市場を歩き回った。市場では「道産ネギは品質がいいから、内地まで送りなさい」と好意的、メンバーも自信を深める。

二月下旬、共同ハウスに種をまき付けるが、苗床づくりは一苦勞。水田なので土はガラガラ、酸性土のため石灰を入れての酸度矯正作業が大変だった。もうひとつは温度管理。育苗適温

は九〜十度とあって、天候をにらんで早朝暗いうちからハウスを巡回する毎日が続いた。

まき付け後四〜五か月、高さ八十センチの段階で、アルミはくとポリエチレンを張り合わせたフィルムで長ネギを包み、一・二メートルまで生長した時点で出荷するのが、軟白長ネギの特徴だ。

長ネギ生産組合

風連町豊里・瑞生

82.10.8(金)

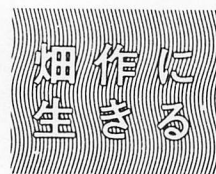


▶13◀

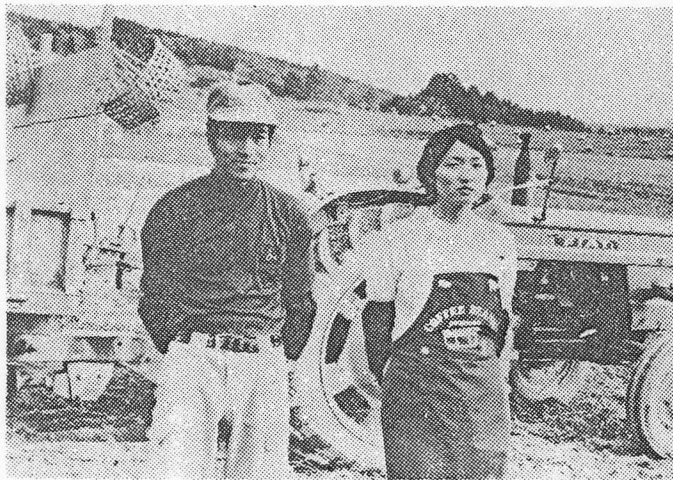
智恵文治の東側の山裾に広がる畑では、短い秋の時期を迎えた。農産物価格の低迷という時代の流れにあって、畑作専業農家を取り巻く経営環境は厳しい。山裾の傾斜地、石れきの多い粘土質土壌と平地の畑作農家では味わうことのないハンデを抱えながら、柴崎富雄さん(三三)宅の営みが続く。

区農業改良普及所の推薦で全道ビート共進会に出場し優秀賞に輝いた。また、

区農業改良普及所の推薦で全道ビート共進会に出場し優秀賞に輝いた。また、



輪作体系を基本に 傾斜地のハンデに挑む



題では考え込んだ日々もあった。『減反政策の始まる四十五年までは、四日クラブにも女性が多く活気があふれた。休耕奨励金が支給されて農村も変化し、女性労働力が他産業に流出、楽しさも減った』と振り返る。『三十歳を過ぎて結婚しない農村青年に対する周囲のまなざしに、ジレンマを感じたことも…。結婚問題は本人の責任』というのも一理あるが、新たなカップル誕生に周囲が協力することも重要。美深では町ぐるみの熱意があるが、名寄市はその姿勢に欠けるのでは…と指摘する。

粘土質土壌で水はけが悪く整地に手間がかかる。当然機械の故障も増える。『石のある畑の人じゃないと大変さはわかりませんよ』としみじみ語る。

『特別の技術があったわけじゃないですよ』と控えめな柴崎さんだが、多収の秘けつは、適期作業と輪作体系がポイント。まき付けの適期を逃がすと秋の収量にぐんと響く。だから、まき付けにはきめ細かな配慮を加える。各品目は三〜四畝に分割して作

付け、輪作体系を確立するとともに、堆肥・緑肥の投入にも心を配っている。

柴崎さん、五年ほど前にタニシの養殖やアイヌネギの冷凍を手がけた時期がある。タニシは冬期間にボイル・冷凍して名寄の料理屋へ、アイヌネギは美深の居酒屋に出荷したが、市場開拓が難しく、経営の主軸に据えるまでには至らな

かった。『片手間で取り組むのでは採算に合わない』というのが得た教訓。現在は畑作専業でやり抜く決意を固めている。

傾斜地のハンデに正面から挑む柴崎さんの営みが今日も続いている。

ほぼ均一に作付けする畑作専業農家だ。この六月に縁あってゴールインした妻の三枝子さん(二七)と父親、妹との四人暮らし。農業歴は富雄さんで三代目。昭和四十二年に名寄農高農業科を卒業後、二年間農作業の傍ら上川支庁農業学園へ通う。四十五年まで二畝の水田もあったが、休耕して全面畑作へ転換。それか

だが、ハンデに負けてはいない。適期作業と輪作体系を基本に、前向きに経営に取り組み。努力の成果はビートの多収穫で実証済みだ。五十年には名寄地

積に対する各方面の評価も高い。

名寄市智恵文智北

柴崎富雄さん

82.10.15(金)

道北 農民群像



▶14◀

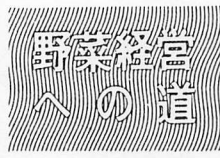
「名寄えびす」の銘柄名で全国的な主産地形成を實現したカボチャを筆頭に、冷涼な気象条件を生かして野菜経営を目指す農家が増えている。十数年前、名寄地方でこれほど野菜部門が充実することを想像した人は少ないはずだ。この分野の草分けとして夏井岩男さん(四三二)の存在は大きい。

夏井さん宅は妻と両親、小二から中三までの二男一女の六人家族。山形県出身で二十五歳の青年も研修に励む。耕作面積は三十二畝と名寄地方ではトップクラス。輪作体系を重視して小麦とスイートコーンを十畝作付けるほか、白菜、小豆、レタス、カボチャ、ニンジン、キャベツ、アスパラ苗を手がける。年間粗収入は八千万円と、最上層の野菜専業農家だ。

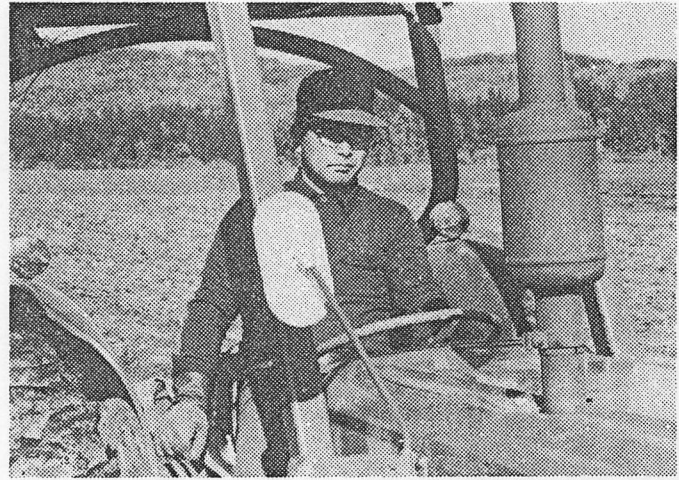
夏井さんが歩んだ道は、決して平坦ではなかった。名寄農高定時制を昭和三十三年に卒業、名寄市日

彰の白樺カントリー奥の傾斜地で畑作と畜産を営む。青年時代は健康がすぐれず、三十八年に敗血症と診断されて北大病院で一年間の闘病生活を送った。退院後は治療の傍ら道の制度を活用して、道南のそ菜先進地へ研修に入る。限界に達していた日彰の農業経営

「びす会」設立、道北そ菜園芸振興会の運営、名寄・智恵文・風連・下川の四農協で組織する道北青果団地(道北青果センターの前身)の拡充と忙しい毎日が続いた。二十代後半の夏井さんが、生産者の仲間づくりを進める傍ら「名寄野菜」の主産地形成を目指した背



産地形成を支える 良質の食糧生産の努力を



野菜経営の場合、地力低下と連作障害がネックとなる例が多い。夏井さんは小豆、小豆、スイートコーンを取り入れ、輪作体系を確立、野菜オンリーの不自然さを解消する努力を続ける。野菜専業農家として著実な歩み続ける夏井さんは、道北農業の将来に積極的提言する。「立地条件を生かした総合的な複合経営でなければ今後の道北農業は成立しない。大型機械導入が万能」と錯覚せずに、経営の一手段と見るべき。味を研究して良質の食糧を供給するのが農民の務め。工夫を凝らして可能性を追求しよう」と積極的だ。そして「地元への良質野菜の供給では、生産者として反省すべき面もある。これから重要なのは女性の食糧に対する意見。せっかく野菜生産地に住みながら、学校給食にレトルト食品ばかりじゃ、豊かな食生活は無理では。地域ぐるみで食糧を考えよう」と訴える。

そ菜経営のリーダーとして、夏井さんの忙しい日々が続いている。

當からの脱出作戦であった。「研修体験が現在の基礎になった」と夏井さんは当時を振り返る。

四十四年に現在地に移転、六畝の土地を購入したのを皮切りに規模拡大、日彰時代に培った野菜経営に本格的に取り組み。四十年から道内市場向けカボチャ生産を手がけ、市場の評価は高まっていた。以来「え

景には、個人出荷しても値をたたかれる厳しい現実があった。

夏井さんらは、名寄地方の特性を生かして野菜定着に努力してきた。本州方面の市場で徹底した調査を実施。昼夜の温度差の大きさがでんぷん蓄積に有効に作用し、品質の良い野菜を生産できる自信を深める。「厳寒に耐える精神の

強じんさが、道北農民にはある」と本州で指摘されたことが励みにもなった。

大規模野菜経営を手がける夏井さんは、綿密な作付け計画による労働力の配分と出荷時期の確定を徹底して行う。作業日誌から各作物の十七当り所要労働時間を算定。年間千七百人に及ぶ雇用労働力を詳しく分折、収穫から逆算して作付

け計画を策定する。だから春先には収穫までのスケジュールがノートにびつしり記帳されているわけだ。「自然が相手だから多少のズレはあっても、だいたい計画通りに進む」と語る。

名寄市智恵文中央
夏井岩男さん

22.10.22

道北

農民群像



▶15◀

二十数年、道北農業は減反の波に洗われ、大きく変容を遂げた。休耕奨励金の支給、他産業への労働力流出という状況の下で、農業で生き抜く難しさは常につきまとう。神田寿昭さん(四一)は、土別市多寄地区のリーダーとして、大地にじっくり腰を据えて農村づくりに取り組む。

足。農業問題の学習を軸に、ガリ版刷りの会報「ひろがり」を発行して会員同士の交流を図った。農村青年から教育委員、市会議員を出そう」と、夜遅くまで語り合ったこともある。自主的に会報発行を続ける神田さんらの営みは、全国にも貴重な存在。同会の

農民の間には休耕奨励金に依存する傾向も生まれた。農業情勢の変容の中で、神田さんらの世代が地域を支える時代になった。『休耕奨励金に依存せずに、転作作物だけで生き残る道を一。兼業農家を守りながら道北農業を発展させよう』と神田さんは言う。

神田さん宅は、妻の恵子さん(三九)と三人の男子、両親の七人家族。農業歴は寿昭さんで三代目。耕作面積は十畝うち半分が水田、残りは転作して大豆、小豆、ビート、タマネギを作付ける。

活動はマスコミなどを通じて広まった。『会報を読み返すと、当時の夢が現実になっている面もある。日本農業のおかれている立場を学ぶ場だった』と神田さんは当時を振り返る。

同会は四十七年ころまで続くが、減反、出稼ぎの増加の波にもまれ自然消滅。米作中心だった土別市の休耕率は今や六五割に達し、

転作作物で生き残るには、規模拡大か反当収益を上げるしかない。多寄地区では今年から期成会を結成、山林百畝を開いて畑を造成して規模拡大を図ることにしている。反当収益を上げるために野菜部門の充実を目指す動きも出てきた。

を四人の仲間と一緒に発足させた。原料には朝日町の木工場のバーク(樹皮)と上土別の肥育農家の牛糞を利用して堆肥生産を開始。最近ではビートくず、し尿、雑穀殻も有効に活用する。同組合では、年間八百〜千トンの堆肥を生産・投入してきたが、昨年はすべての作物の収量がアップした。堆肥投入の狙いを神田さん

にも堆肥は有効』と説明する。奨励金に依存しない農業を」と力説する神田さんは、複式簿記にも力を注ぐ。五十四年に行政サイドで発足した「土別市農業指導士会」の初代会長としても活躍する。同会は市の養成講座を四年間受講して単位を取得した者の集まりだ。現在三十人ほどの指導士が地域の若者を集め、複式簿記の指導にあたっている。『作物ごとの利潤を分析・診断して生かすことが大切。データを分析すると、米と大豆が不利な作物。ビートが最も有利』となった。現在の農産物価格は不当に安い』と語る。

昨年からは多寄農民連盟書記次長も務める。堆肥生産簿記プラス農民運動の視点から「数字による経営分析の徹底と過剰投資を避けることが農村の課題。五畝前後の農民も生き残る独自の農業の道を一。再生産可能な農産物価格アップの運動も大切」と提言する。『農村づくり』のリーダーとして、神田さんの営みが続いている。



地域づくりを支える 奨励金依存からの脱却を



土別市多寄町

神田寿昭さん

昭和29年3月13日(金)



▶16◀

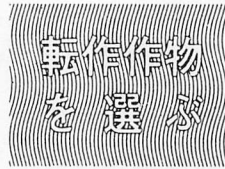
減反が進行する中で、転作作物に何を選択するかは、水田農家にとって差し迫った課題だ。名寄地方でも、近年になって少面積で収益を増大させようと、野菜部門の充実を図る動きが盛んになってきた。米どころ風連でも、長ネギ導入などの試みが続いている。風連の二十〜三十代の若手農民が、昭和五十二年に設立したイチゴ生産組合も、減反後を模索する新しい試み。佐竹勝司さん(三三)は、同組合のリダーとして活躍する。

(小作地を含む)のうち水田が三割、残りは転作してビート、小豆、大正金時で作付ける。イチゴは、ハウスと露地で約六百八十平方メートル栽培中だ。

イチゴ導入は、反収の上がる作物を「と模索していた五十二年当時、名寄地区農業改良普及所の指導を

藤政雄さん(二六)豊里の六人で、全町にまたがる。いずれも耕作面積六〜十二畝で、水稲を五〜六割、残り小麦、ビート、雑穀、野菜を作付ける。

佐竹さんらは、最初の二年間本州からイチゴ苗を取り寄せた。二年ごとに各組員持ち回りで、百八十平



イチゴ生産を試みる プラスチックアルファを求め



十平方メートルで約百万円、露地物だと四〜五割の価格になる。これから、諸経費約五〇割を差し引いたのが農家の手取り——経営の主流には至らないが、夏場の生活費に有効に使われる。

これからの課題は、ケーキなどの業務用分野の開拓と町内での加工利用の道を探ること。『ハウス物採りイチゴは、九月中旬から十月中旬が出荷時期。八〜九月の本州物の端境期に、道産イチゴをケーキ用に利用するなど、需要はまだまだある』と業務用分野の将来性に期待をかける。同組合のイチゴの一部は、町内大町の中島菓子舗で「イチゴ羊かん」と銘打って今年から加工を開始した。「仲間間で加工法が話題にのぼることもしばしば。他産地の実践を研究して、風連でも新分野を求められないか」と今後に夢を広げる。

佐竹さん宅は、妻の愛子さん(三三)と七か月から五歳までの一男二女、両親の七人家族。農業歴は勝司さんと三代目だ。名寄農高定時制を四十四年に卒業

同級生には、下川町で農産物加工に取り組む佐久間和夫さんもいた。現在は、農作業の傍ら名寄市内の建設会社で働く「兼業生活」が続いている。七畝の土地

受けたのがきっかけ。風連町の水田地帯は、少面積のため畑作専業への転換は困難な道だった。二十代の若者が集まり、生産組合をスタートさせることに。

同組合のメンバーは、佐竹さんと粕谷一雄(二六)中央、野宮光彦(二六)瑞生、鈴木郁夫(二五)東風連、田中博幸(二五)旭、中村正宏(二五)日進、佐

方ほどを提供した共同ほ場で育苗を続ける。九月末に定植、一年ほど育苗して各自のほ場へ分散する方式を採用している。現在は、ホクレンからウィルスフリー苗(無病苗)を導入、手塩にかけて育苗する。

イチゴ導入にあたって、道南の大野・豊浦町、道央の富良野市などの先進地に研修に通った。本州産の端

境期に出荷するために、二月二十日ころからスノーブローアで除雪、共同作業でハウスにビニールをかけてゆく。二月末といえはまだ真冬——寒さに耐えて作業に励む。ハウス物の収穫期が、ちやうど田植時期と重なるのも苦心するところ。

『早朝四時半から八時までがイチゴ収穫。すぐさま田植えと忙しい』と作業の苦労を話す。

収穫したイチゴは、三百五十〜すつパック詰め、四パック(一・四*)入りの段ボールで出荷する。消費地は、道北二円とのこと。粗収入は、ハウス物四百五

減反・転作が進む中で、五〜十畝の耕地面積で道北農業が生き残るには、数々の創意工夫がいる。経営のプラスチックアルファを求める意味で、佐竹さんらの実践は参考になる点が多い。

風連町瑞生

佐竹勝司さん

82.11.5(金)



道北 農民群像

▶17◀

乳価の据え置き、購入飼料代の高騰などで、道北酪農を囲む経営環境には厳しいものがある。各種制度資金によって規模拡大を図り、大型機械を導入した酪農家ほど、多額の負債を抱える状態を各地で見かけた。こうした時流の中で、足元を固め、酪農危機を生き抜く営みが、各地で続く。美深町大手の竹本義美さん(三四)は、酪農家としては少面積の土地をフルに活用して、マイペース経営を築いている。

類と青刈りトウモロコシを作付ける。祖父の代に、町内玉川地区に入植。父親は分家して、同地区で五つほどの畑作を営む。大手地区に移転する契機は、親類がいた関係上、父親が土地条件に詳しくあったことによる。昭和三五

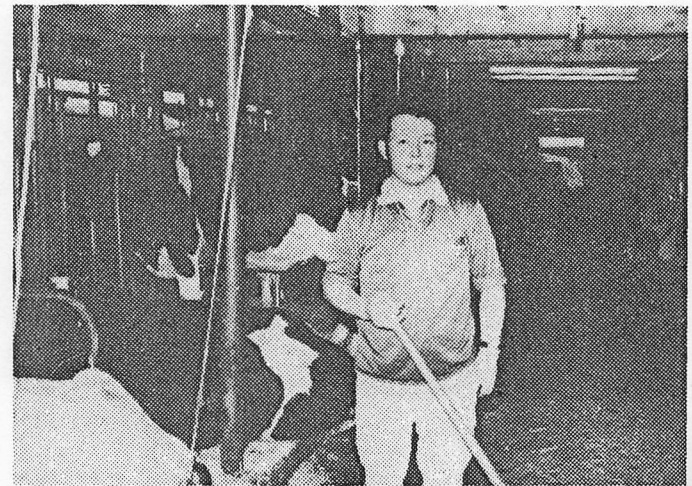
年、玉川の土地を処分して、畜農業の重要性を説いていた。在学中に、通信教育部門の文部大臣賞を受賞、上京して表彰を受け、大きな励みになった。このころから、有畜農業への志向が強まってきた。

同校を四十年に卒業、当時は畑の地力向上を目的に、四、五頭の乳牛を飼育

していた。酪農専業への移行は、四十七年に始まった。天塩川築堤工事に伴い、堤防敷地内にあった住宅を、在地に移転したのがきっかけ。同年に二十四頭用牛舎を建設、休耕田を借りて牧草を作り、酪農の道を歩む。

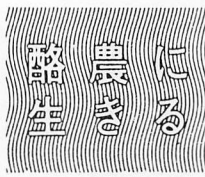
竹本さんのお宅は、妻のより子さん(三三)と小学二年と四年の一男一女、両親の六人家族。成牛三十四頭、育成牛二十一頭を飼育する中堅酪農家だ。耕地面積は、自作地十五畝、道開発局からの借地九畝と、牛の数に比べると少ない。美深町市街地から約十。北上、美深温泉の北側の平たん地に飼料畑が広がる。牧草が十五畝のほか、根菜

竹本さんの経営の特徴は、貸付金に頼らず、極力自己資本でやってきたこと。機械購入と牛舎の増築



本さんの基本姿勢。「離農の原因は、地力がなくて生産がアップしないから。労力を費して、収量が少ないことの挫折感が、離農につながる。今後の決め手は、地力向上でしよう」と指摘を加える。

今後の課題は、粗飼料の自給割合を高め、健康な牛を飼うこと。「ルーサン部門の充実で、高タンパク粗飼料を求めたい。年一回の出産技術のマスターによって、効率よい経営を」。乳価アップの状況にないだけに、内容を充実した多頭化じゃないと生き残れない。高度な技術でなくても、牛の健康を守りながら、充実できるはず」と、マイペース酪農へ意欲的だ。



マイペースで牛飼い 地力向上を経営の基本に

努める。牛の健康に心を配り、少面積の土地をフルに活用して、良質の粗飼料生産を続ける——これが竹本さんの経営の特徴だ。

地力向上が、農業で生きる原則というのが、竹

美深高等酪農学校に通学。酪農との本格的な出会いは、同校時代にさかのぼる。当時の杉森克也校長(現教

育長)らは、適地適作と有

美深高等酪農学校に通学。酪農との本格的な出会いは、同校時代にさかのぼる。当時の杉森克也校長(現教

育長)らは、適地適作と有

美深高等酪農学校に通学。酪農との本格的な出会いは、同校時代にさかのぼる。当時の杉森克也校長(現教

美深町大手

竹本義美さん



道北 農民群像

▶18◀

農村青年の交流を目的に名寄市四Hクラブ連絡協議会が産声をあげたのは昭和二十八年のこと。まもなく三十周年の節目を迎える。高橋典康さん(二八)は、同協議会の三十周年記念事業実行委員会の会長として、四H活動に忙しい日々を送っている。

高橋さんは、三年前に父親と死別して、今は母親との二人暮らし。水田が約二・九畝のほか、約一・二畝の畑には大根、キャベツ、ソバを作付ける。経営面積は、市内では平均より少ない部類に入る。稲は人手を頼んで手植えする一機械化の進んだ今では、曙でも珍しい存在という。冬場も出稼ぎをせずに、マイペース農業に生きる。

名寄農高農業科を四十八年に卒業、祖父の代から営む農業に従事する。四Hクラブ入会は四十九年にさかのぼる。「Heart」心を培う「Hand」腕を

「Head」頭を訓練する。「Health」健康を増進」をスローガンにする四Hクラブでは、プロジェクト計画や実績発表、技術交流会などで盛んに活動を展開していた。

斎藤清志さん(日彰)が会長だった五十二年には、二十五周年事業に参加、村

沈滞ムードだった四H活動も、阿部勇さん(曙)が会長になった五十五年、発想を転換して巻き直した。考え方を柔軟に「表、技術交流会などで盛んに活動を展開していた。」として、農協勤務の若者や農村女性に積極的に関わりかけた。そのかいあって、近年は活気がみなぎる。この八月末には事務所も開設し



有し、仲間づくりをしておけば、十年後にはひとつの財産になると思う」と気軽な参加を呼びかける。

名寄のマチと住民についても「商・工・農が混在している、こういうマチだ」と言えないところ。六月にピヤシリロッジで、カブスカウトの母親と交流したが四Hクラブの内容や農家の実態が知られていないと痛感した」と問題を投げかける。

毎年秋に開かれる産業まつりの在り方にも提言を加える。「一部の農家役員が仕方なく参加している感じで寂しい。市民も、農畜産物が安いから、目やなくてつながら、に目を向けてほしい」と語る。

高橋さんは、農民と消費者の気軽な交流に希望を託す。「樹水まつりでも、四Hクラブで寒さ、雪を逆手に取った企画を話している。ゲームに参加してもらい、賞品代わりに夏にカボチャを届けるよ、というつながりもあるんじゃないかな」と夢を広げる。

若者たちの活動に期待する声も多い。



30年の節目を迎えて 消費者との気軽な交流を

山雅美元南極越冬隊長を招いて記念講演会を企画、自ら運営に奔走した。翌年には周囲の勧めもあつて同協議会の会長に。だが、このころから活動は低迷していく。女性の入会が途絶え、減反の影響で他産業に従事する者が増え、各種行事もふるわなくなった。困難な時期に会長を一年間務めたわけだ。

て、メンバーたちは心おきなく農作業の状況などを語り合う。

最近では、来年二月五日の創立三十周年記念事業の準備に余念がない。すでに基金造成を目的にビールパーティーや廃品回収を実施済みだ。今月四日には午前八時から農家を中心にメンバーが廃品回収一日で十三万円の売り上げがあつ

た。

記念事業では、式典、祝賀会、記念誌発行のほかに俳優の小沢昭一さんを迎えて講演会を企画している。小沢さんを選んだのは「あえて農業関係の人は除外。テレビに登場する人の生の声を聞いて、文化面の接触を深めたい」と理由を語る。熱心に活動続ける高橋さんらだが、課題もある。

現在四十三人いる会員の出席率が五〇%を超えたことは数回だけ」というのも悩みのタネ。「参加するかどうかは本人の自由意志だが、出席したら良さも理解できるのでは」と。体験を共に

高橋さんは、農民と消費者の気軽な交流に希望を託す。「樹水まつりでも、四Hクラブで寒さ、雪を逆手に取った企画を話している。ゲームに参加してもらい、賞品代わりに夏にカボチャを届けるよ、というつながりもあるんじゃないかな」と夢を広げる。

若者たちの活動に期待する声も多い。

名寄市曙
高橋典康さん

52.11.19(金)



▶19◀

国道四〇号線を北上、智恵文峠を越えたとまもなくヘレフォード基地の看板が左手に見える。ここから西へ約三・五キロ、山あいの廃屋を改造した住宅が嶋田東美夫さん(三八)一家のホームベースだ。『家族が力を合わせる事が経営のプラスにつながる。』進歩の貧乏だから、楽しい方向に持っていける』と底抜けに明るい。嶋田さんがたどった『百姓人生』は波乱に富んでいる。

秋田県の半農半商の息子として生まれ育って、昭和三十六年に県内の高校を卒業。フロンティア精神に燃える嶋田さんは、札幌・黒沢牧場を皮切りに帯広、別海村と七年間を費やして独立独立の畜産実習。四十二年には国際農友会の留学生としてアメリカ・アイオワ州で一年間、本場の肉牛飼育を学んだ。

帰国して根釧原野の中標津町に入植、自立経営の第一歩を踏み出す。入植地の周囲には熊の足跡もあったが、端材と波トタンで小屋を造って定住。翌年にはカナダから帰国していた女性と出会い結婚し現在の妻喜久代さん(三五)である。中標津時代は夫妻の努力で肉牛肥育を手がけ、根釧一帯で破竹の勢い。生き抜くという信念は揺るがなかった。

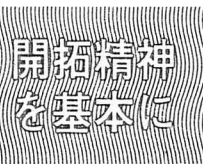
縁あって五十一年に、名古屋畜産基地の構成員となる。だが、営農条件の違う者同士の基地運営と販売体制の未確立の壁は厚かった。根釧時代の繰り返しへの危惧、家族への負担などを考えて、二年前に同基地



切りしたり、わが家の古びたピアノを妻が奏で、子供と聞くのも楽しいね』と笑いとばす。

波乱に富んだ人生から、農業・農民にも鋭い指摘を加える。『百姓は純粋な心を持たなくては。奨励金に依存して甘えては上川農業はダメになる。違った世界があることを知るために、百姓はもつと本を読むべき。農村は文明の利器と大自然が調和できる場所。三十年前の精神的豊かさを追求しよう』と訴えかける。

今後の課題は、小規模でも生活にゆとりある農業基盤を築くこと。『借金さえなければ多くの百姓が十頭の乳牛と畑作で、潤いのある生活ができる。頑張つて、そんな農業に持っていききたい。それを基盤に町の人との交流も深めたい。三十年前の心の豊かさを持って、時流に押されず、デンプン・カボチャだんごの味を忘れない百姓に』と明日への展望を語る。



波乱に富む百姓人生

三十年前の心の豊かさを

これからは粗飼料の時代と考へ、個人では国内初と評されたヘレフォードの導入も実現し最盛期には二百五十頭を飼育した。だが、試練が訪れる。四十九年の肉牛暴落のおおりで、一転して管内一、二位を争う赤字経営に。負債整理に牛を売り払ったが、倒産状態に追い込まれた。血を吐く思いが続いたが、百姓で

を離れることに。

現在の住宅は廃屋を改造したもの。農作業が終わった夜九時すぎから約二時間ずつ補修に通い、人の住める状態にした。家族ぐるみで四百四十平方メートルの納屋を改造して乳牛を飼った。

現在、十五畝の牧草地とトウモロコシ、カボチャ、キャベツ、大根、白菜合わせて三・六畝を作付け、乳

牛二十頭(うち搾乳牛十四頭)を飼育する小規模農業に落ち着いた。家族は夫妻と小学生の一男一女の四人暮らし。生活は豊かではないが、農業に生きる誇りを持つて底抜けに明るい。大規模肉牛経営を経て、

現在の暮らしに至った嶋田さんが『初めて百姓本来の姿になった気がする』としみじみ語る。『山の中で

名寄市智恵文智南

嶋田東美夫さん

津町に入植、自立経営の第一歩を踏み出す。入植地の周囲には熊の足跡もあったが、端材と波トタンで小屋を造って定住。翌年にはカナダから帰国していた女性と出会い結婚し現在の妻喜久代さん(三五)である。中標津時代は夫妻の努力で肉牛肥育を手がけ、根釧一帯で破竹の勢い。

秋田県の半農半商の息子として生まれ育って、昭和三十六年に県内の高校を卒業。フロンティア精神に燃える嶋田さんは、札幌・黒沢牧場を皮切りに帯広、別海村と七年間を費やして独立独立の畜産実習。四十二年には国際農友会の留学生としてアメリカ・アイオワ州で一年間、本場の肉牛飼育を学んだ。

帰国して根釧原野の中標津町に入植、自立経営の第一歩を踏み出す。入植地の周囲には熊の足跡もあったが、端材と波トタンで小屋を造って定住。翌年にはカナダから帰国していた女性と出会い結婚し現在の妻喜久代さん(三五)である。中標津時代は夫妻の努力で肉牛肥育を手がけ、根釧一帯で破竹の勢い。

これからは粗飼料の時代と考へ、個人では国内初と評されたヘレフォードの導入も実現し最盛期には二百五十頭を飼育した。だが、試練が訪れる。四十九年の肉牛暴落のおおりで、一転して管内一、二位を争う赤字経営に。負債整理に牛を売り払ったが、倒産状態に追い込まれた。血を吐く思いが続いたが、百姓で

現在の暮らしに至った嶋田さんが『初めて百姓本来の姿になった気がする』としみじみ語る。『山の中で



道北 農民群像

稲作の北限地帯で米を作
つて二十年あまり。十年前
から着手したモチ米生産
は、苦心の連続だった。青
春時代からの仲間づくり、
簿記の取り組みなどをべー
スに、美深町モチ米生産組
合を育て、今年発足した美
深町稲作部会(中村登会長)
の事務局長も務める。

日本農文学会発行の雑
誌「農民文学」七一年十月
号に「矢口高夫」のペンネ
ームで「経営の原点―日記
と手記をまじえた一追想」
という文章を寄稿したこと
も。経営権のない後継者の
悩み、結婚後の山仕事との
兼業状態、離農の決意と地
元就職への試み、親族会議

を据えた。同会の学習と仲
間づくりは生き続け、現在
の美深町農業複式簿記研究
会へと引き継がれる。
モチ米生産着手は十年ほ
ど前のこと。耐冷性、早期
刈り取り可能、ウルチ並み
の収量などの利点を判断し
ての導入だった。現在、美
深町全体で七十戸あまり、

樋口さんのお宅は、妻の
サキ子さん(三四)小一か
ら中一までの一男一女、母
親の六人家族。オンネモチ
十・六四粍を作付ける稲作
専業農家だ。農業歴は、国
夫さんで三代目になる。

での特ラブルーなど、農村
に生きる悩みを、体験をも
とに書いた文章だ。「この
ころが一番気が張りつめて
いた時期」と当時を振り返
る。喜怒哀楽を分かち合う
ために、渡辺祥一(川西)
山下義博(南)滝川和男(

二百四十九戸のオンネモチ
作付けが進んでいる。青春
時代の仲間たちが、モチ米
生産の主力メンバーになっ
た。定着までは苦心の連続
――モチ米仲間の増大に呼
応した限度数量が得られな
いのが最大の悩みだ。

までを規格外が占めた。米
菓など加工用になる美深米
の場合、品質には問題ない
ものの、価格差がついて
農家経済への影響が大きく
い。五粍でざっと約八十万
円の減収になるわけだ。農
業改良普及所などが原因究
明を急いでいるが、結論は
複合的なものとの見方が強
い。樋口さんは「検査基準
の緩和、品種改良、電光選

別機の導入、防除の見直し
が対策になるのでは」。原
因究明に普及所も頑張っ
てほしい」と語る。
稲作部会事務局長の仕事
も忙しい。同部会は、技術
簿記レクリエーションの
稲作の営みが続く。

「経営権を持たないジレ
ンマ」に悩んだ青春時代に
培った仲間同士の信頼関係
を支えに、樋口さんの北限
の稲作の営みが続く。



三部門で構成。気温把握を
通じた生育調査と稲の観
察、限度数量の配分、視察
旅行の実施などを活動方針
にしている。メンバーの多
くは、簿記研究会に参加し
樋口さんも幹事を務める。
十数年前にまいたタネが、
着実に芽を出してきた昨今
だ。レク部門では、夏に初
のソフトボール大会を開催
――兼業農家の増加で心配
したが、いちおうの成功を
収めた。九月の農業祭りに
は、二十台のトラクターに
「農産物輸入自由化反対」
などのプラカードをつけ
て、街頭パレードも行った。
「仲間の信頼感で活動を続
けるのが一番楽しい。他県
の米菓生産業者との交流に
は学ぶ点が多い。今後は、
モチ米の限度数量拡大、百
葉箱設置による各地点の生
育環境の把握、基盤整備が
課題。簿記を通じて経営分
析を強化して、町内三百戸
の水田死守を」ときっぱり
言い切る。

美深米 生産に意欲

仲間づくりが大きな支え

現在地で生まれ育つて昭
和三十五年に美深高校を卒
業。家業に就く。農業に従
事したのは、自ら望んだわ
けではない。兄がやるゝ
土地がもつたないゝそれ
なら自分が……と考えての
選択だった。多くの農村青
年を抱く、経営権を持たな
いことへの苛立ちが、青春
時代の樋口さんを包んでい
た。

富岡)さんと美深町青年
稲作経営研究会を発足させ
たのが四十三年のこと。活
動の主軸に、農業複式簿記

今年モチ米には、着色
粒が多く、一万八千八百六
俵の出荷量(十一月二十日
現在)のうち、九八・八割

美深町富岡

樋口国夫さん

道北

農民群像



国道四〇号線から西へ約四、水田・酪農・畑作の複合経営に取り組む宗万利行さん(二四)宅の土地と建物が広がる。名寄市四日クラブ連絡協議会の会長として忙しく、青年会活動などにも熱心に加わる、若き「農民群像」である。

宗万さん宅は、両親と祖父との四人暮らし。弟は札幌で就職している。乳牛三十九頭(うち成牛二十頭)牧草地二十二畝、水田一・一畝、転作田二・五畝には飼料作物と野菜類を作付けする複合経営を続ける。昭和初期、祖父の代に現在地の近くに入植し利行さんが子供のころは、水田主体で堆肥生産のために、四・五頭の貸付牛がいた程度だった。瑞穂地区は総戸数二十八戸のうち、酪農専業と酪・水複合が六戸あり、ほかは水田と転作作物を作付ける農家が多い。

酪農学園短大二コース(季節制Ⅱ冬期間のみ)に三年間通う。家業に就く気になったのは、高校に入学したころのこと。牛舎増築もあつたが、ぬかるみの水田は苦手だった。同短大へ全国各地から集まった「牛飼いの仲間」に影響されて、酪農をやり抜く意志が固まる。

参加。「短大での交流が、社会に出てからすぐく役に立った」と振り返る。宗万さんは、高校時代までは「酪農専業を」と考えていた。教師たちも「大型機械導入で近代化される」とバラ色の楽観論をふりまいた時期だ。だが、短大時代には生産調整が進



新技術導入にも意欲 型にはまらず多角的に...



私たちは心配顔。数日後に氷点下二十度以下となり、心配で眠れなかったことも。雪かき、授乳も大仕事だった。結果は良好。牛は寒さに強く、すくすく成長した。「新技術を既成概念にとられず導入できるのが若者の強み。今後も実験を積み重ねたい」と意欲的だ。

四日活動にも忙しい。来年二月、三十周年を迎えるが「宗万君が会長になってから、女性クラブ員が増えた」との声も。宗万さんは「四日のプロジェクト活動を見て、技術面がよろそかになっているのでは...。転作、兼業で若者が出る幕が少ないのも一因だが、最終的には自分がやるのだからもつと真剣に」。三十年の歴史にあぐらをかいたら若者じゃない」と手厳しい。町の青年にも「飲んだ騒いでいじゃ寂しいから、互いを高め合う青年活動が、もつと活発に展開できないか...」と注文をつけた。

同短大には、若くして親から経営を委譲された者、道央の酪農先進地であったりと技術をマスターしている者、学費稼ぎのためにアルバイトづめの級友...などがおり、多くの影響を受ける。現場に携わる者に囲まれ、酪農技術や農政の矛盾を真剣に語った日々も。

農業ゼミナール北海道プロック大会の企画・運営にも

行。水田農家の他産業への流出に疑問を抱き、「米作りや転作で努力するのが本筋では...」と考えた。

一時期、大型酪農に夢を託した宗万さんが「名寄農業問題を語る会」などに参加するうちに、規模に合ったやり方を追求することになった。今では「複合経営がうちの規模にマッチしたやり方。初の専業導入は今ひ

とつたが、型にはまらず多角的に考えることの大切さを実感として受け止めた。これからの百姓は、小規模兼業化の道もあっているのでは...」ときつぱり。

酪農技術の導入にも意欲的だ。四日仲間の尾関章一(智恵文振興)会田孝一(朝日)さんと、昨秋から「カーフハッチ飼育」に取り組む。この方法は、生

名寄市瑞穂

宗万利行さん



道北 農民群像

減反政策の進行の中で、冬期間に三年間通った。稲作オンリーの経営に、多様な工夫がこらされてから久しくなる。名寄市曙の黒井徹さん(三三)は、多角経営を試みる若手農民のひとり。米のほか六品目を作付ける中堅農家だ。名寄農協青年部曙支部長として、農村の仲間づくりにも力を注ぐ。

黒井さん宅は、妻の知恵子さん(三三)と小学校と幼稚園の女の子二人、両親の六人家族。明治末期に山形団体の一員として入植した曾祖父から数えて四代目になる。水田三・八畝のほかに、アスパラガス一・二畝、玉ネギ一・四五畝、イチゴ八畝、長イモ三十畝、大根二十畝、カボチャ四十畝と多角経営を試みる。アスパラは、智恵文共和地区で中島道昭さん(砺波)と共同で栽培している。



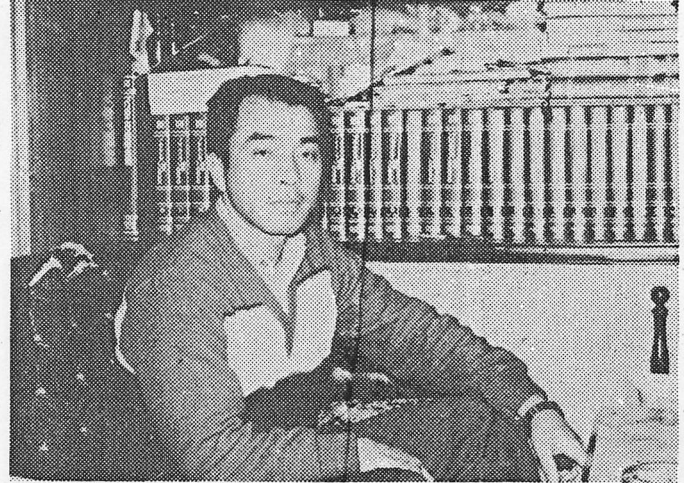
多角経営を目指して 仲間づくりにも力を注ぐ

冬期間に三年間通った。不安があった。以後、道北青果センターの充実もあって、アスパラは順調に推移している。

水田以外はシロウトで、不安があった。以後、道北青果センターの充実もあって、アスパラは順調に推移している。

五十年には、智恵文地区で中島さんとアスパラ共同経営を開始。もともとアスパラ畑だった土地で、普及とともに主軸に据えているのは玉ネギ作り。曙地区の

昭和四十三年に名寄農高農業科を卒業後、深川市にある拓殖短大季節コース(員の紹介もあってスタート



た経営体系を追求するつもりという。地域の若手リーダーとしても活躍する。五十四、五十五年と名寄農協青年部長を経て、昨年から同青年部曙支部長を務める。今後の農協運営について「道北青果センターに頼りすぎて、単協の活動が弱い。そ菜の導入方法など、もっと組織的に追求できないものか」と指摘を加える。

名寄市の農業人口は一〇割を切っているのが現状だが、一次産業の将来にも積極的に発言する。「われわれ生産者が、これだけ安値で売っても消費者にメリットがない。生産力はあるのだから、農民自体が付加価値を高める二次加工の試みなどが大切」と語る。今後のモチ米生産にも「十年の歴史にあぐらをかいてはダメ。水田農家は勉強を重ね、良質米を生産しなければ」と注文を加える。

十九戸で玉ネギ生産組合(村上武治組合長)を三年前に発足、意欲的な取り組みを続ける。今年には作況指数一一〇と良好だったが、価格は六〇でダウンで豊作貧乏。黒井さんは「持続する現在の形態で、規模に合った安定化の道を」。昨年、道知事に会って「名寄に玉ネギの産地指定を」と申し入れたが、実現はまだ先の様子。将来的には、

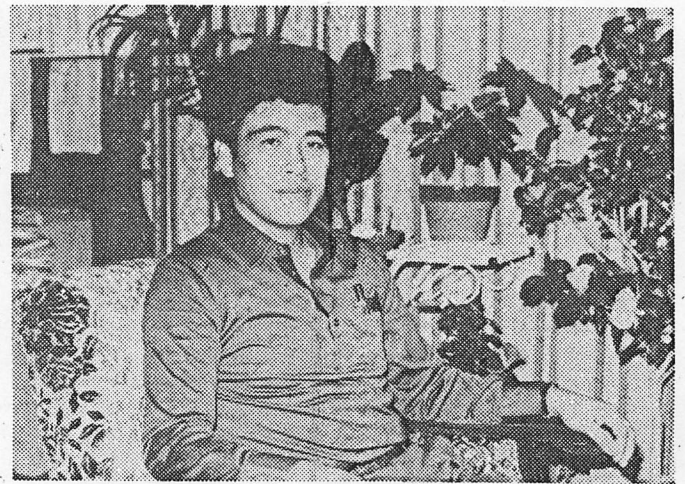
名寄市曙 黒井 徹さん



祖父から数えて三代目、物心ついた時は周囲がすっかり水田になっていた。病弱だった父親を助けながら、北限の米作りを続けて二十一年近い。滝川和男さん(三五)は、地域の共同化、仲間づくりを大切にしながら、美深農協青年部長として忙しい毎日を送る。

卒園——以来、水田ひとすじに生きてきた。四十年代には「先祖代々田んぼの中で、苦勞しながら手作業するのは百姓だけ。農業はいい」と言い、つづ嫁不足なのは矛盾している」と痛切に感じて、仲間づくりを奔走する。だから今では「親父はこうして

差、経済効果が交差して難しい面もあったが、話し合いを続け、滝川さんの土地の一部も提供して、翌年九月に完成をみた。現在は、樋口国夫、山本進、八巻等さんと一緒に、刈り取りから乾燥、モミすりまでを共同で行う。こうした実績は周囲にも



十一月下旬から十二月下旬にかけて、美深町稲作部会(中村登会長)の道外研修旅行団の団長として、愛知・岐阜両県を視察してきた。全農名古屋支所でのモチ米生産高、流通状況、価格推移の聴取、岐阜県米菓工業組合青年部との交流会などを実施。「厳しい指摘も受けたが、美深米への評価も受け、明るい見通しも出てきた」と振り返る。飛騨高山市では「地元の特産物に」と農協が工場を建設して、五十一年から運営している所を見学した。同工場では、アラレのノリ巻き、和紙での包装に地元

りじ 作す 米ひとすじ

地域の仲間が支えに

農民サイドの農協運営を

滝川さん宅は、妻のヒロ子さん(三五)と一歳から小学四年までの一男三女、母親との七人暮らしで大家族。「すべて稲の作付けを」と主張したこともあるが、現在は水田(モチ米)十一・七畝と休耕田三・三畝に小麦、エン麦を作る中堅農家だ。

小学六年の時、父親が病気に倒れ、農作業の第一線から退くことに。母親と一緒に苦勞を重ねつつ、昭和四十二年に美深高等酪農学校を卒業した。その後は上川支庁農業学園水稻科へ二年間通って、四十五年に

百姓で頑張って進歩させたぞ」と子供に残したい」ときっぱり。これまで信念を持って手がけたものに、富岡稲作生産組合のミニ・ライスセンター建設がある。「本格的な稲作には、機械・施設の共同利用で減価償却を節減させて、互いにメリットを

認められて、五十五年には隣接地に農協の麦乾燥施設が完成——ライスセンターとの有機的結合を図っている。現在、年間一万五千俵ほどの小麦を扱うが、生産組合の仲間が支えている——といっても過言ではない。十年ほど前から美深農協青年部の役員を歴任して、五十六年三月から同部長として忙しい。「若いころ部

落の人に世話になったので、恩返しのためで活動している」と語る。青年部では産業まつりの手伝い、農閑期の勉強会などに取り組むが、農協組織が重複していることもあり、運営の難しさは常につきまとう。

美深町富岡 滝川和男さん

美深町富岡

滝川和男さん

追求しよう」と五十年に立案。メンバーの年齢・面積

青年部の役員を歴任して、五十六年三月から同部長として忙しい。「若いころ部

落の人に世話になったので、恩返しのためで活動している」と語る。青年部では産業まつりの手伝い、農閑期の勉強会などに取り組むが、農協組織が重複していることもあり、運営の難しさは常につきまとう。

美深町富岡 滝川和男さん

美深町富岡 滝川和男さん

82.12.25(金)



▶ 24 ◀

農村での子育てには、マ
チの生活では味わえない厳
しき、楽しさがある。名寄
市の智恵文保育園(季節制)
の母親とOBで構成する本
読み聞かせ会では、絵本を
通して子供たちの成長をみ
つめる。ここには、名寄地
方の農村地帯にあって、地
域の特性を生かしたユニー
クな子育ての姿がある。

同会の前身は、智恵光寺
(西尾行仲住職、智恵文中
央)内にあった私立智恵文
保育園時代にさかのぼる。
田口正子さん(元市立名寄
図書館司書)らが、同園保
母だった西尾敏子さんを訪
ね、読み聞かせを勧めてく
れたのが四十八年のこと。
話はトントン拍子で進み、
釣り、神社への散歩など自
然と親しむ保育を進める傍
ら、本をそろえて読み聞か
せ。ワンパクな子供たちも
絵本の世界に引き込まれて
いった。四十九年の「名寄
本読み聞かせ会」発足と同
時に、西尾さんらも会員に

なる。子供を預ける農村の
母親たちが、積極的に読み
聞かせの輪に加わるのは、
二年ほどあとのことだ。西
尾さんは「農作業を続けつ
つ読み聞かせを持続するの
は、意識して努力しないと
できない。母親の絵本の選
択法も深まり、大勢の中の
わが子を見る目が育ち、

際時間は短い、農作業
の合間をぬって出てくる
までが大変。五、十月のま
き付け・収穫時には、非農
家の母親やOBが担当す
る。冬場は月一回集まり、
食事を挟んで影絵や人形劇
などの同時上演も行う。
同会の顔ぶれは、二十、
三十代の主婦で、畑作、酪



子供と絵本を楽しむ 母親の輪を地域に広げる

親子のつながりを実感とし
て得たのでは」と振り返る。
現在は、同園の母親・千
七人で構成する「つばみ会」
と西尾さんらOBが、交代
で絵本を読む。同園は、四
月から十一月までの保育一
八か月のうち一―二回担当
する。春先に各自のスケジ
ュールを出して、計画を立
て、午前中の一時間あまり
を読み聞かせに費やす。実

農、そ菜と業種はさまざま。
とかく引きこもりがちな母
親たちが、外で活動するこ
とで明るいムードが漂う。
OBの佐藤慶子さん(農業)
は「子供と一緒にメルヘン
の世界を感じ取れるし、意
欲的な若い人と一緒に楽し
い。昔の母親は引つ込み思
案で、読みにくのがやっ
と。今は創造的になって、
農家の主婦も変わってき



た」と明るい表情で語る。
十二月二十日は、影絵
絵本とクリスマス会。柏木
重市智恵文支所長扮するサ
ンタクロースも登場して、
子供たちも大喜び。影絵は
二日がかりで製作・練習に
励み、足りない部分は家庭
に持ち帰って準備したもの
だ。この日登場した絵本は
「ソリになったバナの木」
(神沢利子作、国土社刊)。

子供たちは真剣に絵本をみ
つめ、「バナの木を切る時は
かわいそう、だけどソリに
なつて役立ってよかったね
…」との反応も。一月は
人形劇を行う予定だ。
十二月担当の母親たちに
に感想を語る。
農村での子育てに明るい
話題を提供してくれる同
会。母親たちの輪が、地域
づくりに反映する日を待ち
望む声も聞かれる。

「今年から参加した
母親たちは「夏にやった時
は、あがつてしまいがち。家
庭にいると、子供が「今度
いつ読むの?」と尋ねてく
れる。」(親和、上野恭子
さん)「みんなで集まり企
画すると楽しくて。ワク
ワクしてすこした。」(中央
島井尚美さん)「親子が一
緒に参加できるのはいいこ
と。子供を預かる保母さん
も大変だなと思う。」(中央、
島田信子さん)と楽しそう

名寄市智恵文

本読み聞かせ会



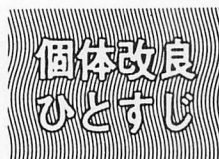
道北 農民群像

▶ 25 ◀

昭和四十年代初めから高能力牛の生産を目指し、酪農経営の基礎を築いた。道北ホルスタイン改良協議会の会長として後進の指導と情報交流に力を注ぐ後藤賢治さん(三七)は、「牛の生理サイクルを理解して、規模拡大を図らずに乳量アップの道を」と話す。

父親の代に入植した朝日町茂志利に生まれる。畑作、水田、牛・豚・鶏などの畜産と少年時代には何でも手がけていた。四十年に父親が死去し名寄農高酪農科を卒業した年のことだ。兼業経営からの脱却は、高校時代からの願望だった。卒業と同時に、成長産業と目された酪農経営に取り組み。『共進会で入賞する乳牛を』と夢を抱き個体改良の道を歩む。数年後には上川地区共進会で上位入賞を果たし、個体販売も有利に進み、経営のプラスになったことで自信を深めた。

十頭前後に増頭した四十



乳量アップを求め

後進の指導にも力を注ぐ

四年に現在地に移転し四十一年から四十九年までは、弟の良治さんと共同経営に取組んだ時期もある。この間、規模拡大をせずに個体改良を進め、移転当時に年間五千頭だった一頭当たり平均乳量を八千頭までアップさせる。

数多くの個体改良を手がけた後藤さんだが、最近の朗報は愛牛の「ミニスター・スカイラク・クリステイン号」が、第九回オール・ニッポン・ホルスタインコンテストで日本一の座を射止めたことだ。同牛は、日本ホルスタイン協会の審査で、百点満点中九十点以上の乳牛に与えられる「エクスレント級」に輝き名寄初の快挙を果たし、畜産関係者の祝福を受けた。

『酪農家同士の団結と情報交流が重要』と力説する後藤さんは、上川・留萌・宗谷管内の仲間と呼びかけて、五十五年道北ホルスタイン改良協議会を設立して会長となる。『地域産業育成の決め手は人材。若者を結束させて実績を上



げ、真剣に勉強することが道北酪農の生き残る道ではないか』と語る。

個体改良の実績をベースに「ゴールなき拡大の道を進んだ酪農の現実にも指摘を加える。『生産過剰に悩んだ十数年前のアメリカ酪農は、頭数を減らした半面、牛群改良を進めて経費をかせずに所得率の向上を期した。これからの日本酪農も規模拡大をせずに、生産量を増やせば乳価据え置きにも耐えられる要素になりうる』と言いつける。

総頭数八十頭(うち搾乳牛約四十頭)三十五頭の耕作面積に牧草一十五畝、青刈りトウモロコシ七畝、家畜ビート一畝を作付けて、残りを放牧地として利用するのが、現在の経営形態。喜枝子夫人(三五)との間

努め、コーンサイレージ・乾草・配合飼料を毎年給する傍ら、冬期間も約二時間ずつ外に放ち、日光浴と運動を欠かさない。『環境七〇割、遺伝三〇割で牛の良し悪しが決まる。私の場合、放牧地が少ないので、今の形態を取っている。日光浴の励行で年間乳量は千頭は達する。事故をなくし足腰の強い牛を育てる』というあたり前のことが、寿命を延ばすコツになる』と牛飼いのポイントを話す。

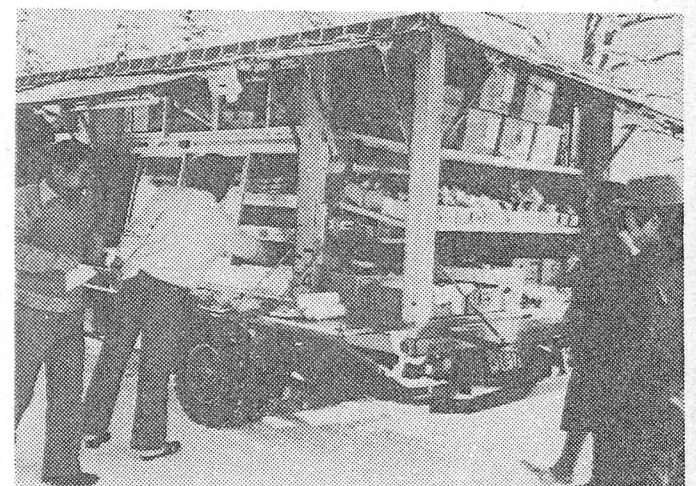
『化学肥料を多投する酪農時代の終わりを。その点、酪農は推きゅう肥を土に還元して一種の貯金ができる。名寄には、まだまだ家畜を飼える要素があり、これを大切にしないと孫子の時代にツケがくる。農畜産物自由化の波の中で、難しい要素はあるが牛乳が一番強いはず。欧米並みの乳価水準を持つ日本酪農は、自由化しても決して負けない。今後規模拡大せずに、平均乳量一万頭を追求したい。みんなで頑張るって生き残ろう』と話した後藤さん。『牛づくり』を着実に歩む毎日が続く。

名寄市智恵文中央

後藤賢治さん



▶ 26 ◀



計画に基づき一定価格で販売を続ける方法は、すっかり定着した様子だ。だが、安易な値上げが許されない中、燃料費アップなどもかさみ、悩みのタネは尽きないという。

農園の年間収入は水稲と養豚部門が一番多く、販売、畑作、園芸、加工の各部門と続く。ジャガイモ、カボチャの内地送りの試みも最近になって始めた。規模拡大に走らず、加工・販売を抱えつつ多様な経営に取り組むメンバーたちの日常は多忙だが、誇りを持って底抜けに明るい。

今後の課題は「諸経費高騰の中でどう生き抜くか」ということ。「残念ながらこれ以上人を雇用して、八時間労働をやったのでは農業経営が成立しない。生産物に付加価値をつけながら、販路を確立するやり方が必要。豚肉販売で消費者の理解も高まっており、生協との提携を求める声もある」と齋藤理事は今後の方向を語ってくれた。

自給自足を基本に、消費者との信頼関係を構築する士別農園の実践は貴重だ。

を、互いに助け合い、新鮮な物を生産して食べることに求めた」と齋藤清久理事は当時を振り返る。

それまですべて水田農家だったメンバーたちは、四十七年に土地探しを開始。経営の柱のひとつに養豚部門を据えることを決め、佐久間さんが畜産実習に通

準備を始めている。現在は水田十九畝とジャガイモ、カボチャ、小麦、そ菜類などを二十畝作付けるほか、豚五百五十頭、鶏約三百羽を飼育して複合経営を追求する。自給自足を基本に豚肉、豆腐、みそ、マヨネーズ、ケチャップ、漬物などを生産・販売する

軽快な音楽を流しながら農事組合法人士別農園(佐久間達雄代表)の冷蔵庫が到着すると、顔なじみになったマチの人々が現れて、生産物を買って求めていく。自ら生産した豚肉や豆腐、漬物、豆類……扱う品目は豊富だ。同農園発足から十年あまり、農畜産物の生産から加工・販売と今までの農民像にないユニークな実践が続いている。

市街地の中心を国道四〇号線が貫く士別市多寄町のはずれに、同農園の事務所や店舗・住宅が広がる。三十五歳から四十三歳(平均年齢三十八歳)までの六世帯で構成する同農園は、四十七年に産声をあげた。市内各地の農村青年が集まり、共同経営の道を選んだのは「親の農業の継続では先が見えており、物足りな

い……」との思いであった。「職業としての農業は効率が悪く、もうかる結果にならない。もうけの代償



産地直売を続ける

加工の充実で販路確立を

う。「豚飼いができるまで帰ってくるな」と励まされたものだ。同年二月に土地を決め、親の仕事を手伝う傍ら基礎づくり。翌年には新たに土地を取得、補助金を活用して豚舎建設を進めた。全員が親から独立して法人体制の整備を図ったのは、五十年になつてから

ユニークな実践を続けていく。共同保育所を建設して、五十年から五年間子育てを行い、事務所内に数百冊の児童図書そろえ「まごころ子供文庫」を命名するなど、心豊かな農村生活を送る工夫も忘れない。

農園独自の豚肉解体・販売を開始したのは五十一年暮れのこの。全国的にも農民出資のミートプラント

車を心待ちにする消費者も多い。販路は名寄市内のウエートが大きく、下川、風連、士別市内をはじめ旭川方面にも出向く。地場生産・自家配合の飼料を用いて安全な豚肉を目指し、年間

士別市多寄町

士別農園

て育てた豚の解体・販売のこと。この年には、農園

のことは、五十一年になつてから

で生産・加工する食品のメニューも増えて、移動販売



昭和四十八年四月、三十二歳の若きで現在地に移動してきた。箭原(やはら)健

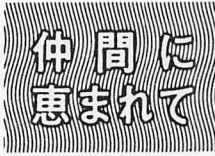
至さん(四一)は、オンネモチの作付けをベースに、仲間たちと玉ネギ生産の試みなどを続ける。「知らない土地で友人に恵まれた。今後は米・玉ネギ・アスパラガスの三本柱で進みたい」と話す。

箭原さんのお宅は、妻の純子さん(三三)小四から中三までの女の子が三人いて五人家族。昨年はオンネモチ九畝のほか、アスパラ一・九畝、玉ネギ〇・八畝、大根〇・三畝などを作付けている。

名寄市農業に生まれ育つて、三十二年に名寄中学校を卒業。少年時代はヤギの乳を搾ってマチの得意先に配るなど、根っから家畜や作物が好きだった。中学校を卒業すると、農繁期は稲作を営む両親を手伝い、暇な時期は働きに出た。二十

代後半には、名寄農協副組長だった父親に代わって、経営を担うことになった。瑞穂に移転した理由は、

瑞穂に移転した理由は、水田を取得、十畝に規模拡大を図った箭原さんは、瑞穂地区初のオンネモチを導入した。丈夫な苗を作るために、当時少なかったハウス育苗も手がけた。「借金を支払いがでなければ、農家をやめよう」と決意して、水田管理を純子さんにまかせて、自ら運送屋



独立独歩で十年間

玉ネギ生産の試み続ける

青年部の仲間たちの応援もあって、四十八年春に現在地に移転した。

当時は「①水田を十畝に

②八ヶタの所得を③米の出荷を千俵に」と三つの夢を抱いていた。だが、移転の年は不作で、さい先の悪いスタート。数年間は機械もそろわず、本格的な稲作は五十一年から始めた。千二

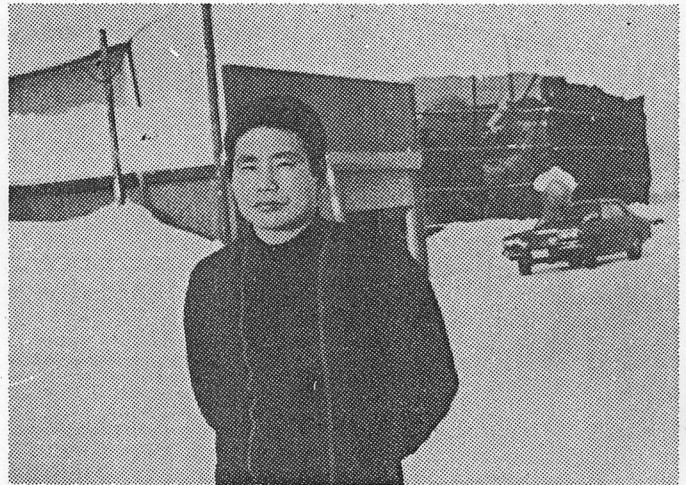
百万円を借金して四・五畝

の水田を取得、十畝に規模拡大を図った箭原さんは、瑞穂地区初のオンネモチを導入した。丈夫な苗を作るために、当時少なかったハウス育苗も手がけた。「借金を支払いがでなければ、農家をやめよう」と決意して、水田管理を純子さんにまかせて、自ら運送屋

を開業。五十一、五十二の二年間、四ト車にプロックを八ト積載して、朝四時から夜九時ころまで走り回った。こうした苦労が功を奏して、経営は軌道に乗ってゆく。

独立独歩で十年間、着実に基礎を築いた箭原さんは、ここ数年、玉ネギ生産に意欲を燃やす。昨年は窪田広行さん(三六)瑞穂

と村岡幸一さん(四二)砺波)の三戸で有利里玉ネギ生産組合(組合長・箭原さん)を発足させた。同組合は育苗ハウスの床作りからまき付け、移植終了まで三夫婦が共同作業を行う。機械の共同利用に限定されがちな中で、同組合の方法は独特だ。「名寄の場合、育苗が今ひとつ——これを補うために、共同化を導入し



がネック。転作が強化される中で、玉ネギ生産を伸ばして市場の評価を高めるには改善を重ねて、カチッとしまった固い物を作る必要がある」と指摘を加える。また、丈夫な苗を育てる工夫も求められており、道北青果センター玉ネギ部会(羽生昭三部長)などで学習を続けている。

箭原さんの経営のモットーは、夫婦で意見が一致しないことは取り組まない点にある。玉ネギ、アスパラの試みも同意の下に進め、先進地視察にも二人で出かける。仲間の窪田、村岡さんも、こうした姿勢は相通じており、共同作業も息の合ったところを見せる。

「名寄のモチ米は、品種がこのままでは品質的に芳しくないのが工夫がいる。玉ネギ生産もまだまだ勉強が必要。今後は仲間と一緒に勉強を続け、米・玉ネギ・アスパラを三本柱に頑張りたい」と前向きだ。ゼロから出発して十年、独立独歩で築いた経営をベースに、土に生きる仲間と語りながら、箭原さん一家の営みが続く。

名寄市瑞穂

箭原 健 至 さん



道北 農民群像

▶ 28 ◀



田の溝切り、収穫後の稲ワラ除去ときめ細かな米作りに奮闘。「その場の対応に追われて、不十分なところばかり。田植えのころから除草、収穫のことを考える農民になりたい」と控える農民に意欲的だ。昨年八月発足した曙機械利用組合(清水宏組合長、六戸)の一員として、田植えから収穫まで機械の共同利用にも加わっている。

四日クラブでは、今も現役。五十五年には会長を務め、沈滞ムードの同クラブに巻き直した。農協勤務の若者や農村女性に働きかけて参加者の広がりを求めたのもこのころ。最近では全道農業改良実績発表大会に同クラブ水稲班と矢吹正さん(市内朝日)が出場権を得るなど明るい話題も多い。

「農業は息が長く、土地や人間に無理をかけると弊害が出る。農業でなければできない生活の豊かさを求め、金銭に代えられない面を大切にしたい」と、土に生きる心をきつぱり。自信と誇りを抱いて、今年の計画を練る昨今だ。

名寄市内の水田農家には珍しく、豚を飼育しながら複合経営を追求する。阿部勇さん(二七)は、堆肥を投入して健全な土づくりを目指す傍ら、機械の共同利用や四日クラブ活動にも意欲を燃やす。「これからは農業が見直される時代。若者が自信を持って勉強することが魅力ある農村づくりにつながる」と話す。

阿部さんは四人きょうだいの二男坊。両親との三人暮らしだが、今月末に結婚して四人家族になる予定だ。昨年は水田五・三畝、ビート一・七畝、小麦一・一畝、ソバ一畝、小豆などを作付ける傍ら、年間六十頭の豚を出荷した。養豚は経済的要素よりも堆肥生産に役立つという。

四十九年に名寄農高農業科を卒業。高校時代は陸上部の長距離ランナーで頑張った。「卒業後は道内で農業実習をやる」と志したが、適当なところがなく



養豚導入で土づくり

自信持ち魅力ある農村を

州で過ごす。二年間、養豚場へ働き、カナダ農業から多くを学んだ。「自家生産の穀物で養豚を営むのがカナダ流のやり方。リース制度が発達しており、計算に合わない大型機械を導入せずに徹底している。小規模家族経営の家庭は、日本

の農家とそれほど変わらなかった」と振り返る。また週末や夜になると家族キャンプを楽しみ、歓談する光景を前にして、ゆとりある農業を感じて帰国した。

帰国後は、農閑期になると稼ぎ生活。夏場に市内の土木現場で働き、夜九時ごろ帰宅する日が続いた。「これじゃ百姓がいやになっってしまう」と思い直して五十二年ころから農業にう

ち込むことに。阿部さん宅の養豚は、母親が「家計の足しに」と年間十頭ほど出荷していたもの。帰国してすぐは、カナダ方式に影響を受け「経営の半分を豚で賄おう」と考えた時期もあった。だが、この夢は少面積の経営規模と飼料代の高騰などで立ち消え。朝・夕一時間半ほどで出来る養豚と水田、転作

作物との複合経営を追求する。市内の水田農家で豚を飼うのは数軒だが、生産された堆肥は土を生かす。阿部さんは「これまで畑に堆肥の投入を続けたが、土が軟らかくなり、差が歴然としてきた」と効用を説明する。

旬に散布する中期除草剤を省略して、除草機械の運転に汗を流した。農業の少ない稲作を目指す試みだが、「水田の作業の中で、一番大変な作業だった」とのこと。このほか、八月には水

名寄市曙

阿部

勇さん

安全な食べ物を提供しよう、との思いから、米作りにも工夫を加える。昨年は初の試みとして、七月初



道北 農民群像

▶ 29 ◀

名寄市内で最大クラス、約五十軒の畑作を営む竹田綱男さん(三四)は、二十代の若さで農協理事となつた。大型機械をフルに導入して、広面積・単作型の農業を続けながら、十五年間の反省に立つて将来を見つめる。

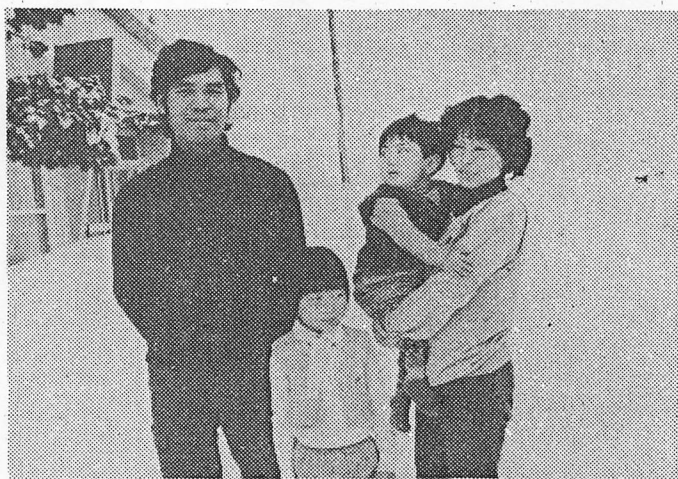
「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」「農協の理念を組合員に教育することを重視する必要がある」と提言する竹田さん。ほかの農民に比べて多様な経験を積み重ね、十五年の歳月が流れた。

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

作る畑作

地方回復に取り組む

若手の農協運営に意欲



区は、今後が期待できる。特に若い女性が外へ出る環境ができれば世の中が変わる」と将来を展望する。根っからの農業好きだから、三人の子供たちには農家をやらせたいと思つている。「大きくなったら何になる？農家だね」とよく子供たちに話しかける。「職業を選択する上で、農業が最も多面的に能力を発揮できる」と確信を持つているからだ。「親が農業を嫌えば、子供がやらないのは当たり前。こうした自覚なしに子供に接しているから、農業がここまで追い詰められた。後継者のいない人は農業組織のリーダーになるべきではない」ときつぱり言い切る。

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

「能力・環境の違いを押し、労働の質を高めて自らの農業の型を見いだすことが大切」

名寄市智恵文振興

竹田綱男さん

83. 2. 18 (金)



▶ 30 ◀

「自立して、雑草のように生きる」と一佐藤美代子さん(三七)は、三人の子供たちに、こうした思いを託して毎日を送る。保母経験の後、農村に嫁いで四年の歳月が流れた。「働くことやお金の価値がわかった子供に育てたい」と考え子育てを続ける。

佐藤さん宅は、夫の一義さんと母親、小三から小六までの二男二女の六人家族。約六畝の水田を作付ける傍ら、転作した一畝の畑で美代子さんが担当するホウレン草を作付ける。この地域の面積では中クラス、ほぼ専業で農業を営む。子育てに手がからなくなつたこともあって、近年は民謡のとりこ。農協婦人部の民謡サークルに参加して、和づくりを求めて練習に励む。開始三年目にして、昨年は道北地区民謡大会で入賞できるまで上達。最近では自分の練習に余念がない。「生涯の趣味にしたい」

と明るい表情で話す。下川町パンケの農家の娘に生まれ育つて、三十八年に下川高校を卒業。高校時代に病気を患い、生きることに失望した時期もあったが、恩師との出会いで仕事を待つことの大切さを感じた。大学進学もあつたが、経済的理由からあきら

自立の子を願って

たくましく子育て 農村の特性生かす工夫を



力が習得して、一人の人間として自立してほしいと願ってきた。家庭の仕事は、子供なりにできることを分擔させる。小学校入学と同時に、草取り、野菜苗の運搬、玄關・部屋の掃除、茶わん洗いなどを各自が分擔。夏の間は、月額五百円の「報酬」を渡す。「今は

きが違う。農家でも手作りを特別視する風潮があるが、子供の健康管理は母親の工夫次第」と指摘する。

「私の場合、保母経験も手伝って、わが子を少し離れた位置から見られる強みがありそう。根っから農業が好きだ」という子供だけが農家をやつてほしい」と言う佐藤さん。農作業の面では転作担当。ホウレン草の作付けは五年目にして、市場出荷の勘どころがつかめてきた。「女でもできる」と自信を深めて、仲間が増えることに期待を寄せる。

佐藤さんの子育てや農業を続けてきて、農村の在り方に考え込むこともある。「最近の子供たちは、家庭の殻に閉じこもる傾向があり、友達づくりが下手。大人同士の結びつきの薄さが反映しているのでは」。心の語り合いを求めて、思いやりのある農村づくりの大切さを感じる」と思いを巡らす昨今だ。

めて、町内の保育園で保母として働く。四年ほど勤めて退職、四十四年に一義さんと結ばれる。農業に疑問を抱いた時期もあったが、友人の影響や三愛塾への参加の経験などから、職業としての農業に生きる意志を固めた。

農家に嫁いで十四年目、三人の子育てを続ける。他人とあいつがで、忍耐

お金があれば何でもできる時代。働くこととお金の価値を教えたて始めた」と佐藤さん流の家庭教育の狙いを語る。五百円をベースに、子供たちは学用品などを購入し、どうしても不足する分を親が援助する。この方法は子供たちに定着して、計画的なお金の使用に努め、けじめがはつきりしてきた。「金額に変動はあ

つても、子供たちが自分で収入を得るまで報酬方式を続けたい」という。

「大人になった時のプレゼントに」と考えて、子供たちの成長過程を、三冊のノートに記入。テストや習字、絵もすべて保存してある。「その子が大人にな

名寄市朝日

佐藤美代子さん

バター、チーズ、アイスクリームを手作りする傍ら、子供たちと清涼飲料水の添加物のことも勉強しあう。「乳製品作りは、近所に酪農家がいって助かる。自家製食品を食べる子供の目の輝きに富んでいる。」

がら十年あまり。農村の特性を生かした試みを続ける佐藤さんのやり方は、示唆に富んでいる。

83. 2. 25 (金)



道北 農民群像

▶ 31 ◀

二月に札幌市で開かれた北海道青年農業者会議で、「田畑輪換に取り組んで」をテーマにした名寄4Hクラブ水稲班の実績発表が優秀賞に輝いた。代表の河本雅人さん(二二朝日)は、三月九日から東京で開かれる全国大会に出場して、各地の4H仲間と交流を図る。「稲作の北限地帯で一生懸命やっている姿勢を全国に伝えよう」とメンバーたちは道北農民の心意気を見せる。

名寄4Hクラブ水稲班には、智恵文地区を除く市内全域から水田農家の若者十六人が集まる。拓殖短大在学中の中村市造さん(一九豊栄)を最年少に、高橋典康さん(二八曙)まで。平均年齢は二十二、二十三歳と若く、笠井範子さん(二三日影)ら三人の女性班員も活躍する。約十年間の歴史を持つ班が、良質米の生産を目指して研究に取り組み始めた

この四年前のことだった。このころから病虫害の発生などで名寄のモチ米の品質が検討されてきた。五十四年には経営面積、後継者の有無、ほ場内容、将来構想などのアンケート調査を実施。プロジェクト活動を通じて、大型機械の踏圧による排水不良や酸害供給

の国島修普及員らのアドバイスを受けながら、調査法や狙いを習得、農作業のできないう雨天時に道立上川農業試験場(旭川市)へ出向きデータ収集も行った。昨年五月上旬の土壌調査を皮切りに熱心な研究を開始。班員の小田桐正彦さん(二四豊栄)宅に、実験田〇



田畑輪換に取り組む 北限稲作の心意気示そう

不足に着目する。収穫後の稲わらのすき込みなどで米の収量、品質ともに低下する実態もわかった。こうした中で班員たちは、野菜などを作付けしたあとの水田(復元田)から収穫するモチ米は質・量ともに良いと聞き、早速五十七年度プロジェクトで試みることにした。

名寄地区農業改良普及所

・四五秒を設置して調査を続けた。温度や苗の管理などのきめ細かな作業は、小田桐さん一家の協力なしには実現できなかった。「実際のリーダは小田桐さん」彼の協力できちんとしたデータが出せた」と河本班長は笑顔を見せる。

研究は土壌調査に始まり苗調査、活着調査、生育調査、収穫調査の順になる。間、各班員が二週間おき



標を持って調査に加わり、充実していた」と小田桐さんらは振り返る。

調査結果は、復元田は活着や初期生育が良く、土壌条件も改善されるため、施肥技術によって収量も増え、玄米も大きくて良質のこと。ただ、品質的には着色粒の発生で規格外になった。全道大会の審査員も「ち密なデータで、田畑輪換の効果が現れている」と講評。優秀賞に選ばれ全国大会の切符を手にした。全国から五百人の農業者青年が発表する同大会に向け、班員は意気盛んだ。「技術的な面よりも、北限地帯でやっている姿勢を示して、名寄の地名を全国に広めたい」と意欲たっぷり。周囲も温かい声援を送る。

今後の課題は、調査結果をどう生かすかだ。「北限でモチ米団地を形成する場合、品質向上は不可欠。美深や風連、下川に負けないだけの品質、収量を目指したい。ともかく、良質の米・野菜生産に今回のデータは役立つのでは」という班員たち。北限の稲作に自信を深める昨今だ。

活着調査は、田植えして十日目に、施肥条件の違う水田から苗を抜き取り、水洗して根を切つて、本数や長さ、大きさなどを調べるものだ。細かな神経を使う調査だが、班員たちは「人なら疲れれるけど、十人も集まれば冗談も飛び出して楽しい」といって明るい。

生育調査は、五、十一月の間、各班員が二週間おき

名寄市 四Hクラブ水稲班



▶ 32 ◀

ていると思うので、今後別な形で取り上げてみてはどうか。道外から嫁いだ人が農業をどう見ているか…などもいいと思う。

鈴木 花嫁不足といふことで親の世代が働きかけるのもいいが、若い人たちは相手を引きつける魅力をも身につけてきた…という

鈴木 優良事例を広めるとか、消費者との交流の場を持つことが、より重要になってくると思う。

内 風連などの水田地帯では、集団・共同化はこれからの課題—それがなければ効率が上がらなくなるでしょう。

鈴木 減反後の実践もいくつか紹介したが…

鈴木 名寄・智恵文・下川・風連四農協管内の場合青果センターの実績を生かせば他地域よりは有利だ。休耕奨励金の見直しも近い印象を受けるね。

個人経営のほかに、

取り上げれば、私たちも農家も参考になる。ひいてはマチの人の農業理解にもつながるし…。

鈴木 優良事例を広めるとか、消費者との交流の場を持つことが、より重要になってくると思う。

鈴木 連載に登場した人々が、地域でつながりを深め、新たな方向が出てくると思う。お互いに協力して頑張りたい。

鈴木 子育て、教育などはプライベートな領域で、私たちがタッチできないものの、生活に潤いをもと芽生えてきたことに農産物加工がある。農家が共同で取り組むケースは少ないが、名寄市の智北富農集団

本企画開始から三十二回
目—農民・グループ紹介に
ピリオドを打ち、農業関係
機関の声を聞いてみた。ま
ず、農業改良普及所からの
発言。内俊郎名寄地区農業
改良普及所長、鈴木清史同
農業改良普及員(名寄担当
・畑作) 鶴岡優子同生活改
良普及員(下川担当)の三
人に語り合ってもらった。

ながりが深い人が多い。
書き手としては、自
立する農民像を描きたかつ
たわけだが…。

は一割を割ったが、食べる
ことを通じて、市民と密接
な関係がある。消費者と結
びつく紙面も期待したい。

内 今は行政主導型の普
及事業は長続きせず、自立
心のある人が普及所、行政、
農協などと結びつく時代。
私たちに問いただし、當農
に取り組み地域の中核的な

鈴木 鶴岡両普及員は、十
数年のキャリアの持ち主。
※ ※

鶴岡 自己完結型の人は
少なく、活動を通して地域
と結びついている面がよく
現れていた。

鈴木 一般紙に農業サイ
ドの企画が登場することは
少なく、心強かった。4日
会員やOBが随分登場した
が、道北農業を拓く意味
で、若い人にスポットを当
てて、今後取り上げてい
ってほしい。名寄の人が多
く登場したが、視点を変え
れば別な人も出てきたんじ
やないか。名寄の農業人口

鈴木 元保母で農村に嫁
いだ人が二人登場したり、
智恵文の本読み聞かせ活動
が紹介されて参考になっ
た。名寄の囀、中名寄など
で季節保育所運営が行わ
れ、若い母親は子育てに熟
心に取り組んでいる。マチ
の女性が農村花嫁となり、
開放的になってきている面
もある。こうした女性は、
独自の農村婦人像を追求し

4日クラブ、美深簿記研
士別農園、朝日農場など集
団も紹介したが…。

内 今後「第三弾」とし
て、生産集団を取材しても
らうとありがたい。反収や
農産物価格のアップが見込
めない厳しい農業情勢の下
で、機械・施設利用の支出
の抑制を追求することが大
切なこと。これらを克服す
る努力を続ける生産集団を

—この企画への感想・
批評からお願いしたい。
内 地元の農業者が、相
互理解を深める意味で役立
人が載っていた観が強い。

鈴木 一般紙に農業サイ
ドの企画が登場することは
少なく、心強かった。4日
会員やOBが随分登場した
が、道北農業を拓く意味
で、若い人にスポットを当
てて、今後取り上げてい
ってほしい。名寄の人が多
く登場したが、視点を変え
れば別な人も出てきたんじ
やないか。名寄の農業人口

鈴木 元保母で農村に嫁
いだ人が二人登場したり、
智恵文の本読み聞かせ活動
が紹介されて参考になっ
た。名寄の囀、中名寄など
で季節保育所運営が行わ
れ、若い母親は子育てに熟
心に取り組んでいる。マチ
の女性が農村花嫁となり、
開放的になってきている面
もある。こうした女性は、
独自の農村婦人像を追求し

4日クラブ、美深簿記研
士別農園、朝日農場など集
団も紹介したが…。

内 今後「第三弾」とし
て、生産集団を取材しても
らうとありがたい。反収や
農産物価格のアップが見込
めない厳しい農業情勢の下
で、機械・施設利用の支出
の抑制を追求することが大
切なこと。これらを克服す
る努力を続ける生産集団を

鈴木 元保母で農村に嫁
いだ人が二人登場したり、
智恵文の本読み聞かせ活動
が紹介されて参考になっ
た。名寄の囀、中名寄など
で季節保育所運営が行わ
れ、若い母親は子育てに熟
心に取り組んでいる。マチ
の女性が農村花嫁となり、
開放的になってきている面
もある。こうした女性は、
独自の農村婦人像を追求し

4日クラブ、美深簿記研
士別農園、朝日農場など集
団も紹介したが…。

内 今後「第三弾」とし
て、生産集団を取材しても
らうとありがたい。反収や
農産物価格のアップが見込
めない厳しい農業情勢の下
で、機械・施設利用の支出
の抑制を追求することが大
切なこと。これらを克服す
る努力を続ける生産集団を

所 言 及 提 普

農民の自立に期待

指導の時代は終わった

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ



つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

つたのでは。連載を振り
返ると、特色ある経営をや
っている人は、普及所とつ

(聞き手・滝川康治記者)

道北 農民群像



▶ 33 ◀

「スして、再度道北農業を位置づけるといい。僕らの課題でもあるが。」

中嶋 道北そ菜の力、モ千米団地の有数き、農産物の品質の良さが、地域住民に以外と知られていない。美土路 とりわけ名寄はそうだね。

美土路 道北にきて二年、知らない人が紹介されて勉強になった。登場した人たちは減反開始当初から発展の端緒をつかみ、近代化路線で突っ走らずに、農民的な複合集約路線を追求してここまで来ている。これは地域の教訓になる半面、圧倒的多数を占める中農層以下は、もっと厳しい状況にある。そこにどう対処するのかという課題が残る。そのために登場した人が農業哲学を身につけていった過程を知りたい。おそらく痛い経験の中から、自ら探り当てた方法で突き

企画の意義と研究者の役割

——この企画への感想と提言からお願したい。

美土路 僕は道北に来て二年、知らない人が紹介されて勉強になった。登場した人たちは減反開始当初から発展の端緒をつかみ、近代化路線で突っ走らずに、農民的な複合集約路線を追求してここまで来ている。これは地域の教訓になる半面、圧倒的多数を占める中農層以下は、もっと厳しい状況にある。そこにどう対処するのかという課題が残る。そのために登場した人が農業哲学を身につけていった過程を知りたい。おそらく痛い経験の中から、自ら探り当てた方法で突き



進んだと思う。婦人も紹介されたが、多くの方がほかの職場の専門的経験を生かして農村づくりを担っている。自ら何かを体得する若い婦人層の形成に、今日のな特徴を感じた。

中嶋 名寄在住七年になるが、道北農業の可能性にかなり大きな展望を持てる

こそ「道北でどう稲作が形成されたのか？」などと、歴史的な視野で地域農業の経過と到達点を確認することも必要だと思ふ。

美土路 夏井さんに頼まれて「道北そ菜の現状と将来」を勉強したが、全国市場の中で名寄市場は有数の産地になっている。だが、

中嶋 周辺の農業者の購買力ひとつを見ても、名寄の商工業に大きな寄与力を持つている。過疎や減反で地域の基盤が崩れていることを組織労働者がもっと理解してほしい。

美土路 自家農産物の加工など大きな課題になるでしょうね。新聞は事例をどんと出して、僕らが基

食糧に責任を持とう

特性生かした農業確立を

こうした認識は地域全体でまだ弱い。今や道北にとどまらず、日本農業と国民的な食糧生産に責任を持つ時代だ。減反続きの中で地域農業を支える中農層を抱えながら、今後どう奮闘するのかに焦点が絞られてくる。道北農業は出稼きや離農、名寄の低所得階層、福祉問題とも結びついている。こうした諸問題をトレ

広い視野から検証する時期

減反後の対応も含めて、道北農業の現状と課題に率直な意見を。

美土路 北海道の農家は食品加工企業に原料を納めて、量で勝負する、という



を歩いたが、道北でも反収水準や技術的格差が目立った。作付体系・基本技術の定着化が、今後の課題になると思ふ。

美土路 現在方向が見えてきているモ千米やそ菜の生産者組織が、もうひとまわり脱皮を迫られる時期がくる。その時、全国的な視野から「先進層だけで突っ走ること」「道北だけで進むのか」「をどらえ返し、困難に向かう中で日本一の産地を維持できる。」

中嶋 美深町の場合、五、六年前と比較すると出稼ぎ数が減少し、兼業内容も後退してきている。つまり「農業で生活する」という道を追求せざるを得ない。そうした中で、農業に戻らざるを得ない若い人に、的確な営農指導をどう行うかも課題でしょう。

美土路 士別農協青年部の調査によると「転作奨励金が打ち切られたらどうするか」との設問に、半数以上が「稲作に戻る」と回答している。のん気なもので、奨励金がなくなると時は、稲作はダメになるという見方で対処しなければならぬ。今のうちに、単なる転作物物じゃなく経営の主軸に、複合集約路線を据える過渡期だ。(つづく)

（聞き手・滝川康治記者）

道北

農民群像



地域密着型の農産物加工を

(18日付からつづく)

各地で農産物加工に
関心が高まっているが、留
意点と今後の課題などを指
摘していただきたい。

美土路 産名寄女子短大
学長 今後は、単に「ちょ
つと加工してもらうけり」と
いう発想じゃなくて、高い
科学技術・文化レベルが生
かされる要素が不可欠にな
る。その意味で下川町の佐
久間和夫君のジャムで一番
好きなのは「ルバーブ」な



んだ。こちらの文化要求を
くすぐってくれる。彼を見
てると、大都市の疎外感に
対する切実な人間要求に着

目し、文化・観光的要素を
導入すると、高いレベルの
新部門が拓けると思う。

中嶋 信助 道北の
農産物は、加工を前提に成
立っており、加工資本がす
でに十分な展開を遂げてい
る。その中で新分野を追求
するのは、全体の作付体系
を変えるわけで簡単じゃな
い。最近「生産が不安定だ
から、付加価値をつけても
うけよう」という空気があ
るが、安直な淡い期待じゃ
成功しない。直ちに商品化
に着手する—という発想の
貧しさを警戒すべきだ。む
しろ農民自身が楽しい生活
を追求する過程で、地域住
民に消費できる形に加工し
て、農業の意味を理解させ
ることが大切。その中から



美土路 名農と短大が提
携して農科大学的なものを

作るとか。道北に先進的
な農科大学ができることが
僕の悲願なんです。

中嶋 どういう農業を期
待するのかわれわれ研究
者は出していく必要がある
。農業哲学を持って営農
技術を身につけ、土地・家
族条件に合った経営を担
い、地域的な広がり追求
する—こうした「自立した
農民」が、ふんだんに現れ
る必要がある。そこで不可
欠なのは、自らを鍛える農
民の学習運動だと思ふ。道
北の場合、他地域に比べ自
主的な動きもあり、基礎も
ある。農科大学はやってみ
たいですね。

消費者と農民 の交流図ろう

消費者の農業理解に
ついて指摘・提言を...

美土路 生産者との距離
が近いんだから、どんだん
交流するといい。その点、
名寄市内などで農産加工品
を直売する土別農園は、着
実に消費者と結びつきを深
めている。やはり、三是の
弥陀みだは眼下にあり、
ですよ。

中嶋 去年、名寄消費者
協会の会員たちと智恵文智
北の営農集団に行つて、ミ
ソヤトウフなどの加工現場
を見学したが、みんなうら
やましがっていた。名寄の
人は「市民」というが、農
村部の生活者なわけで、も
っと地域の農家・農産物と
密着した生活スタイルがあ
ると思う。都会の場合、か
なり苦労して産地直結をや
っているが、道北では無理
なくできる。

生活高める加工の道を 重要な基礎データの収集

念願の道北農 民大学づくり

道北三愛塾や美深町
の農業複式簿記研究会など
着実な学習を積み重ねてい
るケースがあるが、こうし
た農民サイドの取り組みを
どう思われるか。

美土路 名農と短大が提
携して農科大学的なものを

物を生かして地域特性を生
活に見出す必要がある。

を立てるのは、直接生産
を担う農民をおいてない。
農家の実践の中から先駆的
なケースを一般化して整理
するのが、僕ら研究者の仕
事だと思ふ。それを地研を
センターにしてまとめるの
が願いだ。他大学から研究
者がたくさん来て、「現場に
密着した研究所は価値が高
い」と評価されている。研
究者間の交流をひんぱんに
行い、内実を高めることが
今後の課題だと思ふ。



中嶋 道北経済の地盤沈
下を引っぱっているのが地
域農業の崩壊だ。「町づく
り」が議論されるが、道北
の場合、農林業の基盤づく
りなくして成立しない。こ
れが若者やサラリーマンに
理解されていない。

美土路 昨年暮れ、道北
地域研究所でシンポをやつ
たが、音威子府や下川が地
域づくりに真剣だし、士別
のサフォーク研究会は、商
工業者が地域農業を懸命に
考えている。この点、名寄
は立ち遅れており、道北を
基盤に成立している以上、
一次産業の基盤・地域づく
りに対する責任をもつと考
えてほしい。

短大地研の内 実向上が課題

短大地研の設立
から約一年、一次産業を基
本に据えた地域振興をテー
マに奮闘の様子ですが、最
後に現状と展望を...

中嶋 道北農業の見通し

「地図」を提供するような
。この一年間、突っ張つ
てカンパニア的にもやつて
きたが、今後は地道な実態
調査が課題になる。科学的
な先見性を持ったデータ
は、将来必ず役に立つ。そ
の意味で、うちの若い研究
者には、だれにも分らない
地域の基礎実態を明らかに
して欲しい。例えば、農民
層分化と低所得層との関係
とか。研究に当たっては、
短大地研の歴史的性格から
生活・教育面から掘り下げて
いくことがポイントになる
でしょう。

短大地研の奮闘に期待
しています。数々の提言
ありがとうございます。
(聞き手・滝川康治記者)

83.4.1(金)



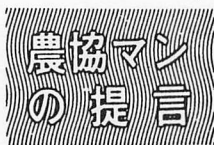
35

「関係機関の提言」―最後は農協関係者の声を聞いてみた。今後の地域農業の方向と農協の対応を、石本昌嗣智恵文農協参事、竹形清英美深農協営農振興課長の二人に提言していただいた。

※ ※

野菜部門充実と簿記を推進

智恵文農協(田中周平組 会長)管内は、基幹畑作のバレイシヨ、ビート、小麦などを中心に、収益性の高さから作付量が増大している。そ菜類のほか、畜産経営に取り組み農家もある。二月には、智恵文中央の夏井岩男さん(四三)が、着実



な野菜経営が評価され、晴れの日本農業賞に輝くなど、明るい話題も多い。石本参事は、日本農業賞に因連して「受賞は過去の実績が評価されたもの。今後は、夏井さんも農協の側もより実績を上げてゆくことが課題になる。各地からの問い合わせに対して、営業管理―という。

を高める傾向が現れているが、正しい方向だ。昼夜の温度差の大きい気象条件から、品質の良い野菜生産が可能なので、今後は研究熱心な組合員と一緒に進みたい」と分析、意欲を見せる。新年度の課題は、農業簿記の確実な記載と組合員の健康管理―という。

農民と歩調を合わせ

智恵文・美深管内の場合

農課が窓口となり対応するほか、実践報告書の発行も予定している」と農協がバックアップする姿勢を表明する。

申告を定着させ、経営内容の伸びを追求したい」とする同農協では、五十八年度を手始めに、まず十五年度の「経営改善農家」を決め、農業複式簿記の記載を義務づけて、各組合員への定着を図る意向だ。また、昨年スタートした智恵文地区健康管理組合の充実を目指すことにしている。

同地区の営農現況を「バレイシヨは、でんぶん原料・食用・加工用―と基礎ができており、小麦、ビート、加工用スイートコーンも着実。こうした基幹作物に加えて、青果部門で付加価値

を高めることに意味がある。加工の形態をとらなくても、各集団で農家の結束力を高める工夫が必要だ。

ひとすじに生きる同中央、後藤賢治さんのように熱心な人も多い。同農協では、コンピューター導入に向けて研究作業に着手、酪農部門でエサの給与量の判定などに役立てる計画だ。「この地区の実態に合った、コンピューターの活用方法を研究したい」と語る。

智北営農集団(五十嵐勝 集団長)による農産加工の試みが、各方面で注目を集めている。石本参事は「この場合、農家の主婦が一堂に会して話し合い、集団の和を高めることに意味がある。加工の形態をとらなくても、各集団で農家の結束力を高める工夫が必要だ。

美深農協(鈴木政二 組合長)では、五十五年から六か年事業として進めている地域農業振興計画の後半部分に、新年度から着手する。

は「...」と提言する。営農と生活が両輪となる農協運営が求められているようだ。

ユリ根生産は比較的長い歴史を持つ。五十八年度は、町の助成などを得てユリ根の鱗片(りんぺん)繁殖施設を富岡地区に建設する予定だ。このほか、昨年からの市場開拓を図ってきたカボチャ、食用バレイシヨの拡充に努め、既存の建物を利用して、農協の保冷場と選果場を造る計画もある。「ユリ根は、三か年計画で六か年まで増反して、将来は年間一億円の販売額にしたい。カボチャ類は、減反の推移によって流動性があるが、より積極的な市場開拓を求めたい」と竹形課長は語る。

本企画で紹介した農業複式簿記研究会(渡辺祥一 会長)の活動に、農協は事務局の役割を担ってきた。昨年は、七十万円程度の助成も行ったが、今後は「後継者育成の見地から、美深独自の営農類型をつくり、経営分析の手法を身につけた」と話していた。

美深町では、パーク(樹皮)を利用した堆肥生産に十九集団、九十八戸が加わっている(同農協の話)。

有畜農家とほかの農家の連携を狙ったもので、五十四年からの取り組みだ。先ごろ全道農協土づくり運動本部から、同運動で優良賞を受賞している。これらの推進も、今後の課題―という。

モチ米への転換、そ菜部門の振興、土づくりが、同農協運営の今後の柱となる模様だ。



83.48(金)



道北 農民群像

▶最終回◀

「道北農民群像」最終回は、三十五回の連載を振り返りながら、道北農業を取り巻く環境と地域づくりの在り方などを考えてみた。

発言の中から 課題みつめる

「岐しい農業情勢の中で、時流に流されることなく大地に根を張り、明るくしたたかに生きる若手農民の姿を紹介し……と連載の冒頭で書いた。当初、十数回程度と考えた本企画は、取材に訪れた農家の方々や関係機関の助言と協力に支えられ、九か月に及ぶロングランになった。取材範囲も本紙管内四市町に別市の二例を加えたが、「もう少し道北各地に広げて紹介してほしい」という一部の声には、様々な限界もあつた。残念ながらこたえることができなかった。

紹介した農家、グループは、名寄十八(うち智恵文

七、美深五、下川三、風連、土別各二の順。水田、畑作、そ菜、畜産、共同経営……と多岐にわたり、簿記や地域学習、基礎研究に取り組みグループも何例か紹介



助言と協力が支えに 住民の農業理解が重要

取材を終る

介した。最後の数回は普及所、名寄女子短大、農協関係者に地域農業の将来を語ってもらい、判断材料の提供に努めてみた。各農家(集団)の生き方・発言の中から、現在の農業が直面する課題をみつめることを企画の主眼においたつもりであつた。

自立する農民 に焦点合わせ

二十数年、減反政策の進行で北限稲作は大きく稼

て見られたのは「奨励金に依存しない」という実践があつた。半面、こうした実践が広がりを見せるには、農民の自立姿勢と関係機関の協力なしには実現できない。転作との絡みから、少面積で高収益が見込める野菜生産の伸びが著しい。名寄、智恵文、下川、風連の四農協で組織する道北青果センターは、全国的にも有数な主産地を形成。美深町でもユリ根などの特用作物振興の気運がある。夏井岩男さんが日本農業賞を受賞し

続ける美深町の竹本義美さん、乳牛の個体改良に意欲を燃やす名寄市の後藤賢治さんらに登場願つた。この人たちに共通する点は、いざ、着実に足場を固めていくこと。集約的な営農に取り組む方法は、畜産物価格の低迷状況の中にあつて積極的な意味を持つはずだ。水稲、畑作、畜産部門とは別に、心豊かな生活を築くことにつながる農村女性の試みも紹介した。童話を通じて農の世界を描く名寄

農業の可能性

道北農業の可能性は、規模や土地条件、家族構成などにマッチした自立経営の定着の中にある。これが連載を通じて得た結論。紙面に登場した人々の先進事例が、地域全体に広がっていくことを期待したい。

その。農家意識にしても「奨励金依存型」から「自立型」まで多様だ。本企画では後者の農家(集団)に焦点を当てた。転作に長ネギやイチゴを導入して努力する風連町の例、堆肥生産組合を設立して仲間と土づくりを進める土別市の神田寿昭さん、アスパラ・玉ネギ

たのは、道北野菜が全国的に評価されたことだ。輪作体系の確立と徹底した簿記の記帳、労力配分の策定……と理論的な農業を求める夏井さんの実践に、農民や地域住民がもっと学ぶ必要がある。

着実に足場を 固める人たち

畜産農家では、品質の良い卵の地元消費に努める下川町の阿部勇夫さん(養鶏)を、少面積でマイベース酪農を

市の五十嵐逸子さん、絵本を通じて農村の子育てを考へる智恵文本読み聞かせ会の歩みなど。マチの生活にない農村文化形成のきっかけになつてほしい。

長い歴史を持つ道北三愛塾、経営分析を目指す美深町農業複式簿記研究会、三十周年を迎えた名寄市4Hクラブなど、集団の歩みも振り返つた。会員の頭打ちなどの悩みを抱える団体もあるが、今まで培つた基礎を広げる努力を期待する声も多い。

(滝川廣治記者)